

俑の濫觴期

原始～殷周時代

The Origins of Terra-Cotta
from Primitive Times to the Shang Zhou Dynasty

于 保 田
U hoden

本文由土地与陶器等の关联性，延伸到人像出现所具的背景。原始至商周时代人体造型及俑的归纳和分析，是为论述的核心构成。

目 次

- 一．土地・陶器と人体表現
- 二．原始人像の思想性
- 三．殷周時代の人像
- 四．殷周時代の人体文様と仮面

一．土地、陶器と人体表現

人像表現はいつ、どんなきっかけで生まれたのか。文字記録が皆無であった太古「先史時代」の様子を辿っていくには、一般的に二つの手段が用いられている。一つは史実を裏付ける伝説や断片的に残されている後世の文献の検証、もう一つは間接的な民族学の調査、直接的な考古学的発見による類似法分析を用いることである。農作物栽培の開始は新石器時代であり、同時期に文化や文明も生まれた。黄河流域では生産に十分な灌漑用水と肥沃な耕地など、農作業を行うための好条件が備わっていた。先進文化の代表として仰韶文化（前 5000 年～前 3000 年）、大汶口文化（前 4300 年～前 2500 年）、龍山文化（前 3000 年～前 2000 年）、河姆渡文化（前 5000 年～前 3500 年）、良渚文化（前 3300 年～前 2200 年）などが挙げられる。この時期から土地への依存度が一段と高まり、土地神信仰が始まった。

（一）土地・信仰・生死観念

前漢・戴徳と戴聖著『礼記』には土地神「社」崇拝の起源について、「社所以神地之道也。地載万物、天垂象、取財於地、取法於天、是以尊天而親地也。（社は神地の道である。地は万物からいただき、また天は人間に意思を示すから、財富を地から得て、天から人道を得て、故に天を尊び地に親しむのである。）」とあり¹⁾、後漢・許慎著『説文解字』には「社、地主也（社とは、土地の神である。）」とある²⁾。この「主」は土地の生産力を主導する神と解釈できる。清・翟灝編『通俗編』では漢代の『孝經緯』を引用し「社者、土地之主。土地広博、故封土以為社而寺祀。報功也。

(社とは、土地の神である。土地が広く〔祭祀を尽くせないため〕封土に社を立て、祭祀する。土地の恩恵に感謝するのである。)」としている³⁾。収穫をもたらす自然界の贈り物として土地に感謝し、恩返し的心を持って祭るのはごく当然の成り行きである。狩猟から農耕へ移行し、農耕が主な生存手段となつてからはこの信仰心が一層強くなった。

○土地と信仰

前6000年頃、世界の大多数の地域ではすでに農業生産が主流となっていた。初期の略奪式原始農業から、次第に肥料を加え土地の養分を高めて耕作し、収穫量を増加させ有効に利用できるようになった。農業の推進は、土地利用の観念を進展させるのに大きく寄与した。また土、石を利用した大規模な城壁が築かれた。400万m²の陝西省神木県石峁^{せきよう}の石と土の城(1976年)⁴⁾、270万m²の山西省襄汾^{じょうふん}県陶寺の土造の城(2002年)⁵⁾、300万m²の浙江省杭州市余杭区瓶窯鎮の石と土の城(2006年～2007年)⁶⁾などがある。こうした城は市民の生活空間であり、生活源の土地を守る役割も持っていた。

「地母神」は生活源を提供してくれる土地と命を生む母を結び付けている。女子が生まれることを指す言葉の「弄瓦^{ろうが}」について、石川忠久氏は「多子を将来無事に出産することを願って、大地の子を生む力が類感呪術的にその女兒にも及ぶ」と述べている⁷⁾。この単語は原始時代からすでに形成された「始祖母」や土地パワーの信仰に由来する。民俗学における土地愛着などの伝説は後世さらに補充され理解が深まっていった。原始時代に信仰が始まった女媧^{じょが}伝説には命の誕生と切り離せない女性の存在があり、また食料確保や生きていくのに欠かせない土の存在もある。多くの古代文明圏の神話に女性の生育能力と土地の生産性はよく登場する。北宋・李昉ら編『太平御覧』には、「天地開辟、未有人民、女媧搏黄土作人。(天地が開かれた時代、民はまだ存在せず、女媧が黄土を指先で弾き、人間を作る。)」と書かれている⁸⁾。

原始時代初期の民衆に崇拜されていたのは主に自然神や動物神であった。しかし、生産性の高まりにつれ人間自身の力量が意識され、人類創造神などが作られるようになり、女媧神もその流れの中で生まれた可能性が高い。人間によって社会が導かれていくという人間信仰の形成により、自然や動物への心理的依存から部分的に離脱した。生命の誕生は、母なる土からさらに新しい食料が生まれることと重なり、農産物の収穫は植物にとっての生命の終結であり、それは人間の死を連想させる。農業生産が安定し、社会経済が著しく発展した漢代、人像表現の中の人気テーマとしてこの「伏羲・女媧^{ふっぎ}」を始祖とする神話が



後漢 女媧像・四川省崇慶県

図1

が多く登場した。例えば、四川省崇慶県出土の画像磚である(四川省博物館蔵)⁹⁾。

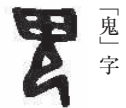
漢代画像石に半人半蛇姿の女媧がよく登場する陝西、四川、山東、河南などの地域は、農耕先進地域であった。四川では、樂山市沱溝嘴画像石崖墓から「女媧俑」と言われる珍しい彫刻が発見されている(1991年)¹⁰⁾。牧畜で生活を営む草原民族には「黄土で人類を作る」というような伝説や民話はほとんど見られない。生産手段の相違により口承文学や神話の信仰対象が異なることが分かる。生殖に対する不可解さゆえに、人類を誕生させる「方法」を「搏黄土作人」とする考えは、原始時代の陶器作りからの思考であると推測できる。その時代の主な手工業であった土を使った陶器生産と使用の過程を生命誕生と結び付けたのである。宋・李昉ら編『太平御覧』では「天

地開辟、未有人民」の世界で、「女媧搏黄土作人」と述べられているが、「民が存在していない」時代において、女媧自身はどのように生まれたのか。戦国・屈原著『楚辞』は「女媧有体、孰制匠之。（女媧、体は有るが、いずれがその体を作ったのか。）」という問題提起をしている¹¹⁾。

生産力が低い原始時代においては、母系社会であれその後の父系社会であれ、男女とも重要な労働力であった。しかし男性を命誕生の神とした例は女性神より稀で、初期段階においては男性を生命の源とする思考は軽視されていた。神話には女媧の兄（もしくは夫）とされる伏羲が登場するが、「伏羲搏黄土」のような伝説はなかった。生命の誕生に男性の関わりがあると認識されても、女性ほど神秘的な力はなく、命の開拓の先端に立つのは女性であった。このような特徴はギリシア・ローマ文明と重なる文化現象と言えよう。中国には女神廟が多く存在しているのに対し、生殖関係や男女の愛情を意味する男神廟はほとんど見られない。

○土地と生死

原始民は誕生から死亡という生命の形成から終焉への過程を十分に認識できなくても、種を撒き新たな命を育てることや収穫後の茎や根の部分の枯れと連想することはできた。自然界の循環の方式に従い、人間も蘇ると考えていた可能性がある。遺体処理として漁民の水葬、狩猟民の森林葬など海、河、山、洞窟への遺棄という方法があるが、農耕者の土葬が最も早く、ほぼ一万年前からすでに「埋葬」として始まっていた。土に埋めることで死者に再生してほしいという願望があったと考えられる。「鬼」という甲骨文字は、土地に埋まる人間の姿を表している。農耕地が「田」で表され、死者が農地の下に葬られたという形象である。実際の出土状況からも、殷代における耕地への埋葬が実証されている。墓地として田が利用されていた背景には、農地の開墾による墓地の減少のほか、埋葬地が村落から近い場所という利便性もある。埋葬地を守ること、また先祖に近くで守られるという目的もあったのであろう。「鬼」字の下部は人が座っているようで、これは体が屈曲した屈肢葬の姿であろう。「魂」、「魔」、「魅」、「魄」などの人間の死に関連する字の構成には、いずれも「鬼」字が含まれている。死者と別れることは悲しいことであるが、死は常に発生することで、鬼に対する恐怖心や崇拝心などは、後代のような深刻なものではなかったと考えられる。人々が死を淡々と受け止めていたイメージが殷代からすでにできていた。孔子語録の『論語』では、「季路問事鬼神、子曰、未能事人、焉能事鬼。（季路が死者の神霊にどうお仕えすべきかと聞くと、孔子が、生きている者にさえきちんとお仕えできていないのに、どうして死者の魂にお仕えすることができようかと答えた。）」とあり、孔子は、鬼つまり死者の魂への奉仕については議論に値しないと考えていた¹²⁾。



「鬼」字

日本では死者を「帰らぬ人」という言葉で表す。中国にも同様の表現がある一方、「回帰大地（大地に帰った）」という言葉で死を表すこともある。『礼記』には「人死曰鬼（人が死ねば鬼という）」や¹³⁾、「衆生必死、死必帰土、是之謂鬼。（衆生は必ず死す、死すれば必ず土に帰り、これを鬼という）」とあり、死者の体が土に「帰」れば、「鬼」になるとの思考である¹⁴⁾。「死ねば土に帰る」という考えは、農作物を含むすべての植物の生存から啓発を与えられたようである。戦国・莊周著『莊子』では「万物云云、各復其根（万物はめいめい根本のところに帰っていく）」、「皆生于土、而反于土（あらゆる生命が土から生まれ、また土に帰る）」とされ、全ての命は土地から授けられ、最終的にどの生命も始点の土に戻ると考えられていたことが分かる。この「各復其根」論は戦国

時代前後の思想の大転換期において土、生命に関する極めて素朴な論説である¹⁵⁾。「皆生于土而反于土」の常理は、長年に渡って築かれた純粋な死生観が文字化された春秋・戦国時代のもので、原始時代の人々を含む昔の人の生命循環に関する思考が集約されたものと考えられる。

(二) 陶器の文化性

紅山文化の遼寧省喀左県と凌源県の大型女神彫刻は、漢代画像石などの女媧像より遙かに早い原始時代に作られた。初期彫像に特有の随意性が見られず、完成度が極めて高い少数の例である。この時代における大多数の彫刻は製作意欲の乏しさやまた作業の難しさから、壺や瓶、盆などの実用器物に付属するものであった。人間生命体を表現する媒体陶器の中では、壺が量的に最も多く、瓶、盆がこれに続く。

○ 荘子の「壺子」

道教始祖の一人とされる戦国時代の荘子は、著作において寓話的人物の「壺子」を自分の師匠とし、会話している¹⁶⁾。「壺子」の名称は、壺を擬人化したことに由来すると言われている。陶器中心の時代において、人々の壺の使用頻度は高く、壺を選んだその背景には壺と人間の密接な関連性があったのであろう。荘子は壺子との会話で、「変化こそ不変の真理」という「道」への哲学的認識を表明した。「生也死之徒、死也生之始（生には死が伴い、死は生の始まりである）」と、両者において対立ないことを述べているが、これは壺作りとの共通点があると考えられる¹⁷⁾。土から壺となり、また壊れていく過程は人間の生命が誕生し、徐々に死に近づいていくことと変わらない。道教思想の「万物斉同」という基礎理念がこの寓話にも含まれている。

列子は壺子に終始、「先生」を意味する「子」という敬称を付けて呼んでいる。これらの表現が壺子の元である壺への敬讓心による呼称であるなら、陶器への高い依拠性や愛着心によると考えられる。道教始祖のもう一人の老子と比べ、荘子の理論では万物の数えきれない多様性、いつでも作り出せる創造性が重んじられている。壺の形状や生産工程における可塑性や延伸性などの特性に魅了されたとも想像できる。宴会の余興で壺に向かって棒を投げ入れる「投壺」というゲームが漢代から明代まで続いた。戦国・左思明著『春秋左氏伝』の「中行穆子相投壺」という記事があり、最も早い壺関連の遊びの文字記録である¹⁸⁾。



後漢 投壺像・河南省南陽市

図2

○ 人像題材



図3 人頭形器口彩陶瓶・甘肅省秦安県

原始時代、労働力の源である子孫の増加や確保は、個々の家庭ひいては部落全体においても重要な問題であった。女性の生殖機能に敬意を示し、出産や人口増加を望んだことから人間の題材が重要視されていたことが分かる。馬家窯文化の甘肅省秦安県大地湾出土の人頭形器口彩陶瓶（1973年、甘肅省博物館蔵）¹⁹⁾は高さ31.8cmで、陶瓶全体がまるで一個の卵のような輪郭線である。この卵形彩陶瓶の製作者は孵化現象から生命の源を連想し、その繁殖力を借用して人間の繁栄を願ったと考えられる。神話伝説が多く含まれている晋代成書の『山海経』には「卵民国」という国が登場しており、この国の人々は全て卵から産まれるとされていた²⁰⁾。

青海省楽都県柳湾三坪台からは男女複合体と言われる「双耳彩陶壺」が出土している（1974年、北京・国家博物館蔵）²¹⁾。壺の高さ33.4cmで、浮き彫りの裸体人像は特に性器が強調されており、出産の能力への尊敬の念か、またその祈願を込めたものと考えられる。男性か女性かは有識者の見解が分かれている。「陰陽人」つまり両性を持っているという解釈もあるが、出土品が作られた母系社会を考えると、女性である可能性が高い。

文様は生産や生活活動の縮図である。原始人が人間対象の題材につ



図5 蛙文像壺・青海省楽都県

いて、どんなことに目を向け何を祈願していたか、文様を通じて読み解くことができる。

陝西省西安市半坡、臨潼県姜寨、宝鶏市北首嶺、青海省楽都県柳湾（青海省彩陶センター蔵）²²⁾などの馬家窯文化、仰韶文化の遺跡では、黒色で描かれた魚文や蛙文が多く発見されている。西安市半坡から出土した人頭の耳の両側に付いている魚の図案は、「人頭・魚文様」と呼ばれている（北京・国家博物館蔵）²³⁾。魚が人間に繁殖

の技を告げており、豊饒多産を祈っていると解釈ができる。多産で知られる自然界の魚から知恵をもらい、より多くの子供を産むという人間の純粋なる繁殖への願いが表れている。

子孫繁殖の願望が間接的に表象されていると思われる現象



図7 彩陶壺・甘肅省蘭州市杏核台

は、同じく魚文様が多く採用された前5000年頃のメソポタミア地域にも見られる。環境や生産方式

が異なる地域にも関わらず、この文様が愛用されたのは人間共通の思考が示されているといえよう。母系社会における女神、壺子寓話、魚文様の誕生には人間の子孫の継承を第一義とする時代の切迫した背景がある。労働力の確保や生命の継承、延命、さらに再生への願いは信仰へと繋がっていった。原始人が天地、自然、神への服従を示し、また自然界に実在するものや人間が作り出した空想動物へ役割

割を持たせるのは世界各地でよく見られることである。川の氾濫と共存するような環境の中で、人間によって誕生させられた災難の加害者である龍を「天子（皇帝）」に例えるという信仰にまでなった。

馬家窯文化の甘肅省蘭州市杏核台出土の彩陶漩渦文双耳壺（1975年、甘肅省臨夏回族自治州博物館蔵）²⁵⁾、また仰韶文化の彩陶水文鉢に見られる「波文」に注目したい。流動的な曲線は河川に恵まれていることへの感謝の意を持つ反面、反乱への危惧が混在しているとも感じられる。



図4 双耳彩陶壺・青海省楽都県

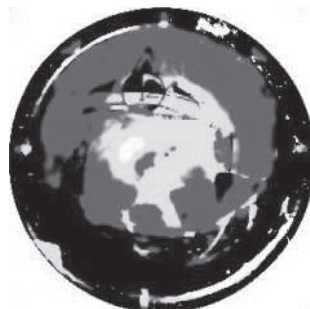


図6 人頭魚像盆・陝西省西安市



彩陶鉢・甘肅省臨夏水地陳家

図8

○陶器の非実用性

土と砂の配分比率、温度の把握は陶製品の生産における基本で、優劣の差がつくのは主に造形、光沢、文様などの芸術性によるところが大きい。粗末な製品の中にも、ユニークな美しさを持つものがある。原始時代の青海省楽都県柳湾墓地の1700基あまりの墓からは、副葬品の陶器3万点以上が出土した。陶器のうち半分以上が彩色品であり、墓主一人あたり彩陶をほぼ8～9個使用している換算になる(1974年～1980年発掘、北京・国家博物館、青海省楽都県柳湾彩陶博物館)²⁶⁾。生産力がまだ高くなかった原始時代において、わざわざ生産した陶器の副葬は、一種の宗教的行為であろう。龍山文化時代の黒陶瓶は美しい造形を持ち、磁器のような光沢は「陶製の玉」とも言われる。省東部では卵の殻のような薄さを持ち、極めて精巧な蛋(卵)殻陶がこの地域特有のものとして注目された²⁷⁾。山東膠県三里河遺跡出土の陶製の犬形、豚形鬲、高柄杯(1975年)²⁸⁾、同省泰安市大汶口出土の陶製赤色獣形壺(1959年)には注ぎ口が作られている。山東省濰坊市姚官荘、同省臨沂市大範荘、日照市東海峪などの地からも同様の器物が発見された²⁹⁾。制作者の好みを反映した原始人の美への追及心や情熱を感じ取ることができる。

(三) 人像作りの第一歩

○絵画と彫刻

世界規模で見れば、人体絵画作品が最も早く登場したのは、フランス西南部のラスコー洞窟や、スペイン北部のアルタミラ洞窟の壁画である。ともに15000年前の旧石器時代、狩猟中心の生活を営んでいた部落民による作品と推定されている。

現在のところ、中国の旧石器時代の石彫刻と判明しているのは、福建省平和県の礫石類彫刻などの少数例だけである³⁰⁾。新石器時代からは人像彫刻が多くなった。以下は主な実例である。

黄河上流域

【大地湾一期文化(前5300年～前4800年)】

甘肅省秦安県大地湾の居住遺跡、地面に描かれた人体像(1982年)³¹⁾。



人頭魚絵・陝西省西安市

図9

【仰韶文化(前5000年～前3000年)】

陝西省西安市半坡出土の文化シンボルとも言える人頭・魚絵画が、高さ16.5cm、口径39.5cmの陶製盆に描かれている(1955年、北京・国家博物館蔵)³²⁾。

甘肅省甘谷県西坪遺跡の彩陶製瓶の腹部に人面、山椒魚の文様が描かれている(1958年)³³⁾。

【宗日文化(前3300年～前2050年)】

青海省同徳県巴溝郷團結村宗日村、二人で物を抱える文様、彩絵製盆、高さ11.3cm、口径24.2cm(1995年、青海省文物考古研究所蔵)³⁴⁾。同地出土、「舞踏文」陶製盆、高さ12.5cm、口径22.8cm(1994～95年、青海省文物考古研究所蔵)³⁵⁾。



物持ち文彩絵盆・青海省同徳県

図10

【馬家窯文化（前 3100 年～前 2700 年）】



舞蹈文彩絵盆・青海省大通県
図 11

原始時代において陶器文様の傑作として注目されている、青海省大通県上孫家寨出土の舞蹈文陶製彩絵盆は高さ 36cm、15 人が 3 組に分かれて手をつなぎ踊っている図である。全員が頭の右側におさげのような飾りか辮髪をつけ、揺れ動く集団舞蹈の様子を表している。統一の動作による体操とも考えられる。このような群舞を介して結束力の高まりを表現し

たとも思われる（1973 年、北京・国家博物館蔵）³⁶⁾。

甘肅省会寧県牛門洞の陶製舞蹈盆、15人3組の群舞（1994年）³⁷⁾。

甘肅省武威県新華郷磨嘴子の陶製舞蹈盆、9 人 2 組の群舞（1991 年）。

青海省同徳県巴溝郷團結村 157 号墓の陶製舞蹈文盆、12 人 2 組の群舞（1995 年、青海省文物考古研究所蔵）³⁸⁾。



舞蹈文彩絵盆・青海省同徳県
図 12

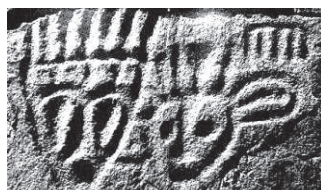
馬家窯文化遺跡から複数の舞蹈文彩陶盆が発見されている³⁹⁾。

江蘇省連雲港市將軍崖の岩絵（前 4000 年）においては、人頭・植物図をはじめ、生殖祈願図などが彫られている（1979 年）⁴⁰⁾。

内モンゴル中部区域にある陰山、西部にある狼山の岩絵は、遊牧や狩猟の内容が中心で、生殖祈願などの祭祀活動に関連ある絵画、文身、黥顔の表現もある⁴¹⁾。寧夏自治区銀川市近辺の賀蘭山遺跡では、男女交合の生殖関連の岩画が発見されている。また、家畜の牛や馬、野生の鹿や狼など動物の描写もあり、飼育と狩猟中心の生活が伺える⁴²⁾。2008 年から新たに賀蘭山蘇峪口を中心に行われた調査では、初期の岩画の主な題材として多くの人面が採用されたことが判明している⁴³⁾。



岩絵人頭図・江蘇省連雲港市
図 13



岩絵人頭図・内モンゴル陰山
図 14

原始時代においては僅かな宗教関係の彫刻を除いて人像と言っても性別さえも判明できない例が多い。人体彫刻品を、「全身」像、「部分」像に分類するならば、部分像の中には元々全身像として作られても、損傷、欠落により残体となったケースが多い。人頭像の首部分はその片割れも存在する可能性があり、儀式用の仮面とは別物である。審美意識の乏しさや加工手法の制限により、生まれた傑作があっても偶然性が高い。特に感情表現もほとんど見られず喜怒哀楽の描写の実現はだいぶ後のことである。

【石峁文化（前 5000 年～前 3000 年）】

人頭像、陝西省神木県高家堡鎮石峁村墓採集、玉製。人頭像は石峁彫像の代表作として名高い。口を少し開け目は大きく、頬部には丸い孔が開いている。高さ 4.5cm。また、石製人頭像も同地から出土して

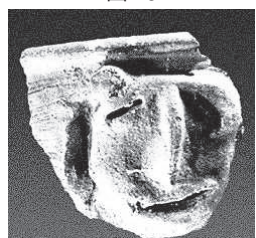


人頭像・陝西省神木県石峁
図 15

おり、目が大きく、鼻が凹んでいる。頬が膨らんでいる表現からは微笑みを感じられる(1976年、陝西歴史博物館蔵)⁴⁴⁾。



人頭像・甘肅省秦安県
図 16



人頭像・陝西省扶風県
図 18

人頭像、陝西省宝鶏市北首嶺出土、陶製。丸顔、黒色の眉、髭を持つ。空洞で目と口を表し、耳たぶには穴が開いている。中年男性と思われる(1958年)⁵¹⁾。

跽(跪)坐人上半身像、陝西省宝鶏市北首嶺出土、陶製。頭部は発見されておらず、両手を腰部で交差している。高さ 6.7cm (1977 年)⁵²⁾。

上半身像、陝西省臨潼県鄧家莊出土、陶製(1978 年、臨潼県博物館蔵)⁵³⁾。



人頭像・甘肅省臨夏市
図 20

人頭像の高さ 10cm で、楕円形の顔で顎部が凹んでおり、耳たぶには穴が開いている⁵⁶⁾。

人頭像、河南省陝県七里鋪出土、陶製。残存の目、鼻、口の識別が可能⁵⁷⁾。
人頭像、陝西省西郷県何家湾出土、骨彫刻、高さ 2.5cm。頭像は動物の骨で作られ、目が突き出しており、耳の部分のみが浅く細い線で表示されている(1982 年、陝西省考古研究所蔵)⁵⁸⁾。

人頭像、甘肅省甘南チベット自治州卓尼県木耳郷出土、陶製。彩色瓶に付

【仰韶文化(前 5000 年～前 3000 年)】

人頭像、甘肅省秦安県寺嘴村出土、陶製。瓶の高さ 26cm で、口径が 6.5cm、底部径が 8.8cm。瓶の口が人間の頭部で表されている(1975 年、秦安県文化館蔵)⁴⁵⁾。

人頭像、甘肅省天水市師趙村出土、陶製。彩陶器に彫られたレリーフ⁴⁶⁾。

人頭像、陝西省南鄭県龍岡寺 396 号墓出土、陶製。桃型で、目、鼻、口が陶器を貫通する表現(1983～1984 年)⁴⁷⁾。

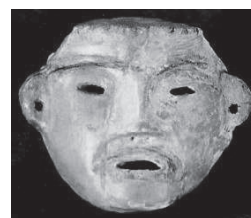
人頭像、陝西省扶風県絳帳姜西村出土、陶製。盆(甕)の器口部分に彫られた苦笑いのような表象⁴⁸⁾。

人頭像、陶製、甘肅省礼県高寺頭出土、瓶の器口部分(1964 年、礼県文化館蔵)⁴⁹⁾。

人頭像、陝西省華県柳子鎮出土、陶製。目、鼻、口の識別が可能⁵⁰⁾。



人頭像・甘肅省天水市趙村
図 17



人頭像・陝西省宝鶏市
図 19

人頭像、甘肅省天水市柴家坪出土、陶製。人頭像は高さ 25.5cm で、幅 16cm である。眉が細く、空洞で目と口を表し、両方の耳たぶには穴が開いている(1979 年、甘肅省博物館蔵)⁵⁴⁾。

人頭像、甘肅省臨夏市収集、陶製。人頭像の高さ 7.5cm で、幅 6.5cm である。全体が菱形であり、両耳に穴があることから器物の蓋と考えられる。両目と鼻の下に二本の縦線が描かれているが、悲しみを表す涙か鼻水であろう(1986 年、甘肅省博物館蔵)⁵⁵⁾。

人頭像、陝西省安康県五里郷柳家河出土、陶製。



人頭像・陝西省商県
図 21

属(1989年、甘南州博物館蔵)⁵⁹⁾。

人頭像、甘肅省甘谷県礼辛鎮出土、陶製。彩色壺に付属している(1988年)⁶⁰⁾。

人頭像、陝西省商県出土、陶製。壺の器口付属(1953年、半坡博物館蔵)⁶¹⁾。

人頭像、陝西省黄陵県出土、陶製(西安半坡博物館蔵)⁶²⁾。

人頭像、陝西省洛南県出土、陶製。壺の器口付属、赤色⁶³⁾。

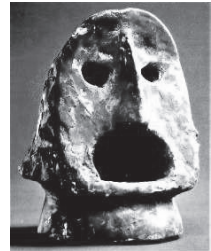
人頭像、陝西省合陽県呉家営出土、陶製(1988年)⁶⁴⁾。

人頭像、陝西省安康市柳家河出土、陶製⁶⁵⁾。

人面飾、河南省靈宝市北陽平出土、陶製。器物の付属⁶⁶⁾。

妊婦像、陝西省扶風県案板出土、陶製(1991年)⁶⁷⁾。

平式帽子をかぶる像、陝西省扶風県案板出土、陶製(1991年)⁶⁸⁾。



人頭像・陝西省黄陵県
図 22

【馬家窯文化(前 3100 年～前 2700 年)】

人頭像、甘肅省秦安県大地湾出土、陶製。高さ 31.8cm で、壺口に彩色された人頭形が付いており、瓶の口が髪のある人間の頭部で表されている。陶瓶の真ん中には人間の胴部、その下部の文様も性器関連であり妊娠題材と言える(1973年、甘肅省博物館蔵)⁶⁹⁾。

人頭像、甘肅省秦安県寺嘴出土、紅陶製、高さ 26cm、口径 6.5cm、底径 8.8cm。瓶の口部が少々欠損しているが、目の部分ははっきり表わされている(1975年)⁷⁰⁾。



人頭像・
SWE 東方博物館蔵
図 23

裸体人像、青海省楽都県柳湾三坪台出土、陶製、彩壺に付属。高さ 33.4cm で、口径は 9.2cm。「性別不明」または「両性別複体像」と言われている。露骨な性器表現はおそらく生殖関係と思われる(1974年)⁷¹⁾。

人頭像、甘肅省永昌県^{えんおうち}鴛鴦池 50 号墓出土、石製(1973年)。高さ 3.9cm、幅 2.6cm。この石彫が墓主中年男性の左肩に付けられており、邪気払いの意味があると推測されている(1973年、甘肅省博物館蔵)⁷²⁾。

人頭像、出土地不明、陶製。壺の蓋に表されている。スウェーデン国立東方博物館蔵⁷³⁾。

【四壩文化(前 2000 年～前 1600 年)】

人形容器、甘肅省玉門市火烧溝出土、陶製。空洞で表現された目、耳には穴が開いている。胸、腹部には方格文がついている。高さ 20cm (1988年、甘肅省文物考古研究所蔵)。

黄河中流域

【裴李岡文化(前 6000 年～前 5400 年)】

人頭像、河南省密県莪溝北岡出土、陶製。老人の形象と解釈されている(1978年、河南省文物研究所蔵)⁷⁴⁾。

黄河下流域

【後李文化(前 6500 年～前 5500 年)】

人体像、山東省章丘市西河出土、陶製(1997年)⁷⁵⁾。

【大汶口文化(前 4300 年～2600 年)】

人頭像、山東省長島県北莊遺址第 69 号灰坑出土、陶製、長さ 15cm (北京大学賽克勒(サクラー)考古芸術博物館蔵)⁷⁶⁾。

人頭像、山東省滕県崗上村出土、玉製。「正面がやや隆起しており、長方形で目、鼻、口が彫られ、

裏面には直線の凹凸があり、その上に穴が開いている。」(1970年代中期)⁷⁷⁾。

【龍山文化(前3000年～前2000年)】

人体像、山東省濰坊市姚官莊出土、陶製、高さ4cm、唇の部分は脱落している。男性と思われる(1960年)⁷⁸⁾。

人頭像、河南省陝県七里鋪出土、灰陶製、目、鼻、口部分が残存している(1958年)⁷⁹⁾。

裸体人像、河南省湯陰県白営村出土、陶製、高圈足盤に刻まれている(1976～1978年)⁸⁰⁾。

北方地域

【興隆窪文化(前6200年～前5400年頃)】

裸体女性像、河北省灤平県後台子出土、石製、6体の内4体は妊婦と推測されている。高さ32.7cm(1983年、灤平県博物館蔵)⁸¹⁾。

人体像、同河北省灤平県金溝屯出土、石製、2体。眉、目などが表現されている。両手は胸で交差し、両足はつながっている。小さいものは6cmの高さで、手を挙げあぐらをかいだ動態である(1983年)⁸²⁾。

【磁山文化(前6000年～前5200年)】

人頭像、河北省武安県出土、石製。額に穴が開いており、仮面と推測できる(1973年、邯鄲市博物館蔵)⁸³⁾。

【趙宝溝文化(前5400年～前4500年)】

人頭像、内モンゴル自治区赤峰市敖漢(オーハン)旗趙宝溝出土、石製(1986年)⁸⁴⁾。

長江上流域

【大溪文化(前5000年～前3000年)】早期

人頭像、四川省巫山県大溪64号墓出土、石製。黒色で楕円形、高さ6cm、幅3.6cm、厚さが1cm、表裏両面とも顔が彫られ、口が開いているレリーフ彫刻(1959年、四川省博物館蔵)⁸⁵⁾。器物造形や文様を介し、大溪文化の屈家嶺文化、仰韶文化との関連性について指摘されている⁸⁶⁾。



人頭像・四川省巫山県

図24

長江中流域

【薛家岡文化(前3500年～前3000年)】

人頭像、安徽省望江県汪洋廟出土、陶製。赤色円柱体の上端にある彫刻。

高さ13.4cm、直径6.5cm。砂が混ざっており、「夾砂陶器」と呼ばれている。鼻が隆起しており、目と口が空洞となっている(1981～1982年)⁸⁷⁾。



跪坐像・湖北省天門県鄧家湾

跪坐像・湖北省天門県鄧家湾

図25

【湖北龍山文化(青龍泉三期文化前3000年～前2000年)】

人体像、湖北省天門市出土、陶製。人物像が2体で各8.7cmと、9.7cm、跪坐式、1体は髻を結び両手を組み腹の前に置いている。もう1体は髪の毛が平らで、鼻、耳がはっきり分かるが、目と口の輪郭線が曖昧である(1978年、荊州博物館蔵)⁸⁸⁾。

人体像、同地出土、陶製。顔に二本の縦文

様が付いている。高さ 16.4cm (1992 年)⁸⁹⁾。

【石家河文化 (前 3000 ～前 2000 年)】

鸞攫人頭文佩、湖北省天門県石家河出土、玉製。「神祖面文」像、玉製、高さ 3.5cm 幅 6.5cm⁹⁰⁾。
盤座人像、陶製、頭部なし、両手で魚のような形状の物を持ち上げようとしている。高さ 5.2cm⁹¹⁾。

人頭像
湖北省天門県肖家屋脊



図 26

人頭像、湖北省天門県肖家屋脊 6 号甕棺墓出土、玉製、高さ 3.7cm (1988 年、荊州市博物館蔵)⁹²⁾。

人頭像、湖南省安郷県湯家岡出土、陶製。眉骨、鼻、口部が隆起している。高さ 4cm、「老人の頭像」と言われている (1978 年)⁹³⁾。

人頭像、湖南省澧県宋家台出土、陶製、灰色⁹⁴⁾。

人体像、湖南省華容県車轎山^{しゃこ}出土、陶製⁹⁵⁾。

長江下流域

【双墩文化 (前 5300 年～?)】

人頭像、安徽省蚌埠市双墩出土、陶製。楕円形の頭部に突出した眉毛、鼻から両頬に伸びる五個ずつの穴が印象的である (1985 年～現在)。同地で発見された陶器に刻まれた 630 個以上の符号の発見は、双墩文化を代表するものであり、文字の起源との関わりが大いに注目されている⁹⁶⁾。

【河姆渡文化 (前 5000 年～前 4500 年)】

人頭像、浙江省余姚県河姆渡出土、陶製。楕円形、高さ 4cm、目が大きく、顎が突出し、髪の毛は無く、目、口が描かれており、男性と思われる (1973 ～ 74 年、浙江省博物館蔵)⁹⁷⁾。

人頭像、浙江省余姚県河姆渡出土、陶製。不規則な楕円形、高さ 4.5cm、幅 3.3cm。顔には凹みで眼窩が表現されている。頬が突出し、口は開き、顎が尖っている (1977 ～ 78 年、浙江省博物館蔵)⁹⁸⁾。

【馬家浜文化 (前 5000 年～前 4000 年)】

人頭像、浙江省海寧県彭城出土、陶製、高さ 3.5cm、幅 4.1cm。顎が三角形で、猿型顔と発表されている (1959 年)⁹⁹⁾。

裸体像、浙江省桐郷県羅家角出土、陶製、高さ 6.5cm。立った姿勢で頭部および両肩が欠け、胸、腹、尻が突き出て、両足が少々開いている。男性生殖器が表現されている (1980 年)¹⁰⁰⁾。



図 29 神人像・浙江省余杭県



人頭像・安徽省蚌埠市
図 27



人体像・安徽省含山県
凌家灘 1 号墓



図 28

【含山文化 (前 3500 年頃)】

人体像、安徽省含山県凌家灘 1 号墓出土、玉製 (1987 年、故宮博物院蔵)¹⁰¹⁾。完成度の高い人体像が特例として注目されている。

【良渚文化 (前 3000 ～前 2000 年)】

人形觶^{けい}、江蘇省呉県張陵山 1 号墓出土、玉製。高さ 6cm、幅 1.2cm (1977 年)¹⁰²⁾。

「神人」像、玉製、浙江省余杭県反山12号墓出土。高さ10cm(1986年、浙江省文物考古研究所蔵)¹⁰³⁾。この鉞の獸面文様の表現意義をめぐっては、様々な解釈が発表されている。主に一体双身論、「上神下人」論、「上人下神」論の「人、獸造型の併合」などが有力な見解として一般的に受け入れられている。

遼河流域

【紅山文化(前3400年～2900年)】

「女神」像、「妊婦裸体」像類が人体彫刻品の大半を示しており、その完成度の高さが目立つ。

人頭像、遼寧省東溝馬家店郷後窪屯出土、石製¹⁰⁴⁾。

妊婦裸体像、泥質紅陶塑、遼寧省喀左県東山嘴村出土、女性の性器が「▽」の印で表現されている。小型の像は残存部分の高さ5cmと5.8cmで、大型の像は80cm位、いずれも頭部が欠損している(1982年、遼寧省博物館蔵)¹⁰⁵⁾。



女神頭像・遼寧省凌源県
図31

女性頭像、遼寧省凌源県牛河梁出土、陶製。高さ23.5cm、粗泥製で中が空洞である(1983年)。大規模な祭祀遺跡の女神廟と思われる場所で発見されている。「女神像」と名付けられたこの像の顔面には青い石によって目が表わされ、肌は淡紅色で表されている。写実性という観点において原始社会の彫刻としてはトップレベルである(1983年、遼寧省博物館蔵)¹⁰⁶⁾。



図30

妊婦裸体像・遼寧省喀左県

半身像、内モンゴル赤峰市西水泉出土、陶製。頭部が欠落しており、残り部分の高さは3.8cm。乳房が突起していることから女性の可能性が高い(1963年)¹⁰⁷⁾。

人体像、内モンゴル赤峰市敖漢旗興隆窪出土、陶製。中は空洞で躯体全体が磨かれ、部分的に黒色が施されている。高さ55cm。両手が腰部で曲がり、目下の人と談話するような動作である。写実手法に長けた職人によって作られたものと思われる(1983～1984年)。

双性四面人壺、内モンゴル庫倫旗発見、陶製。高さ47.4cm、人体を巧みに器形と組み合わせ、陶壺の足には女性、男性の性器が表現されている(北京・国家博物館蔵)¹⁰⁸⁾。

座式人像、出土地不明、玉製(欧州、香港の個人所蔵)。この人像について、A. Angus Forsyth氏は、紅山文化に属するものであると分析している¹⁰⁹⁾。

数体の石人頭像が遼寧省朝陽市龍城区で出土しており、その中の一体は欧州人種と推測されている(2015年)¹¹⁰⁾。

人頭像、遼寧省大連市北吳屯出土、陶製。浅い刻痕による三つのレリーフ¹¹¹⁾。

○生産類・生活類

過酷な自然の中で生活していた原始人たちは日々、猛獸や自然災害の脅威に見舞われ、食料の保証は全くなかった。死と隣り合わせの時代において、芸術美への追求心や関心はあってもそれほど強いものではなかったであろう。原始時代の人像のほとんどが陶壺などの媒体に依存している。単体は少なく、骨組みを使用する陶塑の実例もごく僅かである。砂や土の配分などの技術面は、次第に改善され進化が見られるようになった。人体描写への第一歩を踏み出したのは、新石器時代である。芸術性を帯びた陶製塑像、陶器の付属彫塑、文様を検証すると、本題の人間表現

に関連する内容が単純な「記録」である場合もあれば、人と人、人と動物、人と神の地位関係を表現する作品の場合もある。原始時代の絵画や彫刻の人像作品は主に生産、生活を題材にして作られていた。農業、漁狩猟業、牧畜業などの生産活動は人々の命を維持する基本手段であり、これらをテーマとして選んだのは当然であろう。

生産活動の初期段階においては、被写体として人間は動植物より量的に少ない。寧夏石嘴山市黒石岬の岩絵は羊をはじめ、犬、鹿、狼などの動物画が多く、人間は僅かである¹¹²⁾。江蘇省連雲港市將軍崖の岩絵「人頭植物図」は植物と人の頭部が線で繋がっており、両者の密接な関係が示されている。舞踏のような娯楽題材も発見されている。青海省大通県上孫家寨出土の彩陶盆の多数人間の舞踏題材は、集団生活の連帯性や豊作への喜びが表されており、祭祀の一場面である可能性もある。晋・葛洪著『西京雜記』には「既而相與連臂踏地為節、歌赤鳳皇來、乃巫俗也。(それが済むと、お互いに腕を組み、足踏みをしながら調子を取り、『赤鳳皇來』を歌う。一種の巫術の風俗である。)」と記載されている¹¹³⁾。四川省、雲南省の南東部の麻栗坡、南部の滄源などの山間部では、人体が描かれた岩絵が発見されており、頭部に羽飾りをつけた人像是舞踏関連のようである¹¹⁴⁾。これらの地域で出土した舞踊図の人物は、ほとんど手をつないでおり、これは豊作、祭祀、あるいは葬式の一過程とも考えられる。

唐・魏徵ら編『隋書』に「置屍館舍、鄰里少年、各持弓箭、繞屍而歌、以箭扣弓為節。其歌詞說平生樂事、以至終卒、大抵亦猶今之挽歌(遺体を館舍に置き、近所の少年たちが各々弓矢を持ち、屍体を囲んで歌い、矢で弓を叩き、リズムをとる。その歌詞は死者の一生の楽しい事から、死亡までを語る。大体、今の挽歌と酷似している。)」と、死者追悼の歌を歌いながら踊ることが記録されている¹¹⁵⁾。唐代の文献でも触れられており、湖南省辺りの土家族をはじめ西南地域の葬儀には欠かせないものとなっていた。生産力の低い時代の農業や狩猟において、特に危険性の高い狩猟の成功のために団結力が求められ、群舞などの統一性のある表象は結束力の強まりを表現している。

○原始時代の「俑」

原始時代における「俑」は、墓用と人体彫刻作品の二種類で、副葬品としてはそれほど意欲的に使用されていなかった。孔子の「俑不仁」論述により春秋時代末期「俑」の字が使用された。最初に俑が作られたのは春秋・戦国時代であるという主張は、現在でも依然として主流である。春秋時代以前の原始時代、殷時代の墓出土の人体彫刻品を俑と見なすべきであるとの主張に賛成の意を示している者は多くはない。かつて実用品であっても副葬品として一旦埋められたものは、「俑」と見なして差し支えないだろう。埋葬されたことにより人像の性格が変化しているためである。墓に副葬されるという俑の定義に基づき、関連のある実例は以下のとおりである。

馬家窯文化、甘肅省永昌県鶯鶯池 50 号墓の石製人頭像 (1973 年)。

仰韶文化、陝西省南鄭県龍岡寺 396 号墓の陶製桃型人頭像 (1983 ~ 1984 年)。

大溪文化、四川省巫山県大溪 64 号墓の石製人頭像 (1959 年)。

龍山文化、陝西省神木県石峁墓葬の玉製側面人頭像 (1976 年)。

含山文化、安徽省含山県凌家灘 29 号墓の玉製人体像 (1987 年)。

二. 原始人像の思想性

(一) 原始人体作品の制作意図

○性格

芸術活動は物質の豊かさと連動することが多いが、生産力の低い原始時代において、芸術分野の人像制作がすでに始まっていた。発見物の多くは、粗末で随意性に溢れるものばかりであり、何を表現しようとしたものか分からない。

現代人はそれらの作品に対し、ある程度、趣を感じる部分もあるが、これは人類初期の段階の背景や事情を配慮する気持ちが働くことに関連している。現実を美しく表象し、更に現実以上のものを追求する心は芸術の原点であるが、原始時代の大多数の作品にそれが反映されなかったのは表現力の限界による。芸術表現は生産生活全般との関連性はあっても、原始人にとって生活存続に芸術活動は必須ではなかった。実用的な器物さえも不足していたにも関わらず、なぜ一部の原始民は人体彫刻品に目を向けていたのだろうか。一時的な衝動や非営利的な自己満足であり、特定の表現を目的としないものだったと考えられる。

受動的、偶発的にできた低レベルの作品が原始時代の主流である中、一部の稀有な人体彫刻品が注目されている。それらの作品は、ほぼ例外なく獲物や農作物の収穫への願い、あるいは人口繁殖の祈願を表現した原始宗教に関連している。作品が現れた地域は必ずしも時代の先進地域とは言えないが、原始時代晩期からは経済状況の地域差が次第に鮮明となった。人体彫刻品の有無は、地域的生産レベルとの連動性が見られる。生産力が向上した結果、ある程度生存が確保され、そのため心理的余裕が生まれた。宗教彫刻である紅山文化の女神像や、良渚文化の玉琮に細かく刻まれた部落首領と思われる人体彫刻品、また仰韶、馬家窯文化の陶器に描かれた人題材など四文化は原始時代において量、質ともに最も進んでいる。

○共感獲得と自己満足

作品の制作意図は大きく分ければ、主に「鑑賞者の共感を呼ぶ」とことと「自己満足」という二点であろう。前者は少なからず宣伝目的や利潤との繋がりがあり、後者は製作者自身の心の糧として精神世界を充実させたものといえよう。原始時代の彫刻や絵画などの製作者は原始彫刻師や原始画家と現代人に言われても、その時代において専門職は無い。彼らの芸術活動は労働と兼任するものであろう。「自己満足」について、原始人の埋葬用の（実用品からの転用も含む）陶器や後世の墓室にある壁画は、墓という閉鎖空間に閉じ込められている以上展示や披露するためのものではない。死亡者や遺族の心境を表現することで製作の達成感も得られ、その作品は人間の精神の根源とも言える原始宗教との関連がある。このように自己満足の願望 — 静かな祈り — 朦朧（潜在的意識の）宗教 — 充実（教規のある）宗教へのプロセスという歩みが、原始時代にはすでに見え始めていた。この時代の自己満足の表現の大半は完成度に拘ることのない、自分の作品への自己認定である。

湯恵生氏は、中国西北や西南の岩画や彩陶の中でよく見られる両手を挙げてしゃがんでいる図像を分析し、それまで解釈されてきた「蛙」文様を否定し、「蹲踞式人形」と呼ぶべきであると主張している¹¹⁶⁾。人間の特定の動作を表象しようとする新しい動きは、製作者自身への肯定でもあり、対象者への奨励でもある。原始時代の人類は、天候、自然、植物、動物への崇拝を経て、

殷
虎頭跪座人像・河南省周口市


図 32

ようやく人間自身をも神の祭壇に登らせた。良渚文化の玉製王様像はその代表例である。後世の玉器や青銅器の半人半虎、伏羲、女媧のような半人半蛇の合成・併合神は、動物類のパワーを借りながら人間がそのまま神になるといった人間重視への道を表象したものであった（玉製虎頭跪座人像、河南省周口市鹿邑 1997 年出土）¹¹⁷⁾。人々が人間そのものへの敬讓心を持つようになり、これが人類発展の欠かせない推進力となっていった。

原始時代において、まだ単独に人体のみを表現する彫刻品は少なかったが、こうした模索がある程度展開されたのは画期的なことである。陶器には人像表現の絵が画かれ、陶器を媒体にした人体表現の彫刻が彫られた。しかし、陶器はあくまで実用的なものであり、芸術創作に利用できるスペースは制限されている。このため、原始人たちは器物依存から、より自由に作品として表現できる単体物の製作へ移行しようとしていた。砂の増量など適正な配分比率の把握に努め、また骨組みの使用により構造が安定し、それまでの困難を克服してより高度な段階へ進んでいくこととなった。

（二）女性と女性神像

○墳墓と子宮

ここではまず墳墓と女性特有の器官である子宮の関連性について触れてみたい。一見、両者の間につながりを見出すのは難しいが、マリヤ・ギンブタス氏は『The Living Goddesses: Religion in Pre-patriarchal Europe 活着的女神（生きている女神）』の中で、tomb（墓）の語源は womb（子宮）で、ラテン文字の借用であるとしている¹¹⁸⁾。氏のヨーロッパ語族への分析を拝読したのを契機に墓造りの意匠を改めて考えると、死者を複製、再現、再生する願いを込めて埋葬することが、元々埋葬目的の一つであったと思われる。埋葬対象への愛情に基づいて多くの埋葬手法を介し、遺族の心を癒そうとした。古い時代において地下の womb（子宮）による再生を願う遺族の気持ちが少なからず含まれていたであろう。死という現象がよく理解できなかった時代の、一連の死者を蘇えらせる模索の中では積極的な考え方と言えよう。西方のローマ字文化圏に対し、漢字文化圏においても類似した実例が見られる。「宮」や「房」などの建物を示す名称は女性器官の「子宮」、「乳房」などに由来している。これらの言葉が住居の囲まれた閉鎖的スペースや入り口などを指し、新たな命が授かる空間や子どもの成長の元である栄養を与える器官を指すのに、最も相応しい借用語と考えられる。これらの実例は間接的に原始時代文化の中核的女性崇拜を継承している。

中国原始時代の埋葬で最も注目されるのは「屈体式埋葬」という股関節、膝関節を折り曲げた方法である。特に新石器時代中期（前 7000 年～前 4000 年）以後の実例が各地で多く発見されている。何徳亮、牛瑞紅両氏の「大汶口－龍山文化屈肢葬俗探析」論文では、黄河流域の大汶口、龍山、齊家文化発掘資料のほか、四川、雲南、新疆、チベット、台湾などの民族調査、および日本、オーストラリア、アフリカ大陸、南米大陸の民俗解析を通じて、この埋葬法と生育との関連性が論じられている¹¹⁹⁾。「子宮にある胎児の姿を真似る」ということがこの屈体式埋葬の起因として支持されている。出生当時の姿で母なる大地の「子宮」つまり墓室に入り、再び育てられることで、この世にもう一度誕生することを祈願したのであろう。

甘肅省武威県皇娘娘台の埋葬内容は「成人男女合葬がすでに慣例化し、全てにおいて男性が左で、女性が右である。男性は墓の真ん中に置かれた仰向けの直肢葬であるのに対し、女性が横に傾けられ屈肢して男性の方を向いている。」とされている¹²⁰⁾。1969～77年の殷墟の埋葬様式では、仰身(仰向け)葬が68.1%、俯身(下向き)葬が27.8%で、屈肢葬は単は4.1%に過ぎず、「子宮回帰」、「生命再生」の意味がすでに失われていた¹²¹⁾。また、陝西省鳳翔県にある秦公1号墓(1976年)からは186体の屈肢葬の遺体が発見されているが、これは先に述べた例とは異なり、省スペースの為の埋葬と考えられる。屈体式埋葬は日本の弥生時代前期にも見られる。また、西域においても楼蘭遺跡から西100kmの小河墓地で似た埋葬法が確認されている(2002年)。小河墓地では遺体が船形木棺に葬られ、船で「天国」に運ばれ、新しい場所で生活を始めることを願ったと考えられている。

新石器時代から初めて死体の埋葬が行われ、副葬品も登場した。エジプトでは、内臓を摘出し死体が腐らないようにとの願いからミイラ造りが行われた。エジプトの遺体処理法に対し、中国では甕棺葬が挙げられる。幼児の遺骨が収納されている甕棺葬は、陶製の象徴的子宫と解釈できる。アジアでは中国以外にもインドネシアのジャワ島、ベトナム中部、日本の東北から九州の各地でこのような甕棺葬が見られる。それらは新石器時代に当たる時期が最も多かったと見られる。埋葬者の年齢層も幼児とは限らず、例えば日本では成人の甕棺葬実例がある。陝西省宝鶏市北首嶺131号墓では30余歳の女性の甕棺葬が発見されている。

孔が開けられた甕が陝西省西安市の仰韶文化遺跡で発見されており、この孔は、死後に死者の魂が自由に出入りするための通路と考えられる。死者の魂は流動的なものという認識から、静止状態で葬具に留め置こうとする思考もあれば、逆に通路を用意し自由自在にあの世とこの世を往来できるように工夫も存在した。雲南省元謀県大墩子出土の甕棺は「多数の甕棺の肩部、腹部、底部には意図的に1～3個の穴が開けられ、口径1.5～2cmである。中原地域の仰韶文化の甕棺葬と似ており、靈魂不滅という觀念の反映と思われる」、「甕棺の多くが西に傾くのは習俗のようである」と報告されている¹²²⁾。このような原始時代からの靈魂往復への通路提供の思考が二千年以後も受け継がれていると思われる例として、湖北省随県(現随州市)曾侯乙墓の外棺に描かれた窓がある。これは靈魂の出入りのために用意された往来門であろう(1977年、湖北省博物館蔵)。

○生育象徴の女性像

裴李岡文化(前6000年～前5400年)陶器には、乳房の強調された女性像がある¹²³⁾。興隆窪文化(前6200年～前5400年)河北省灤平県金溝屯鎮後台子からは、胸部のふくらみが表象された女性雕像が収集された(1983年、灤平県博物館蔵)¹²⁴⁾。仰韶文化(前5000年～前3000年)、「少女」と称される陶製頭像。甘肅省礼県高寺頭村出土、頭像の高さ12.5cmで、頭蓋部分には穴が開いており、実用品ではなく何らかの宗教崇拝との関連性があると推測される(1964年)¹²⁵⁾。陝西

省西安市半坡出土、老女と言われる陶製頭像、高さ4.6cm¹²⁶⁾。紅陶壺の器口に表された少女頭像、陝西省商県出土、壺の高さ23cmで、頭部の高さ7.8cm。顔に対照的に髪の毛が螺旋のように表現され、微笑みの表情がはっきりしている¹²⁷⁾。女性頭像、遼寧省凌源県牛河梁出土、赤色陶塑



少女頭像・甘肅省礼県高寺頭

図33

(1983 年)¹²⁸⁾。女性像、内モンゴル自治区赤峰市西水泉出土、陶製、高さが 3.8cm、乳房が強調されている(1963 年)¹²⁹⁾。性別の判明できない石製人像、内モンゴル巴林右旗那斯台出土、両手が交差し、跪坐、裸体(1980 年)¹³⁰⁾。馬家窯文化(前 3100 年～前 2700 年)、青海省楽都県柳湾三坪台出土の双耳彩陶壺に施された男女複合体人像、人間の頭と四肢が裸体で表現されており、男性か女性か判別できない(1974 年、北京・国家博物館蔵)¹³¹⁾。

人類の文明初期において人間関係の原始宗教は、女体や女神に関わるものであった。女性裸体像を製作することにより、生殖崇拝や安産祈願をした。「生命の源」という觀念に基づいて作られた表象の特徴は、世界共通認識であると思われる。



図 34 女神像・北メソポタミア(ハラフ期)



図 35

女神像・ウィーン自然史博物館蔵

中央アジア初期の例として前 5000 年北メソポタミアの高さ 2.8-9.0cm の女神像などが挙げられる(東京・個人蔵)¹³²⁾。さらにより古い実例として旧石器時代のオーリニャック-ペリゴール期(前 20000 年頃)の原始ヴィーナス(Venus of Willendorf)と呼ばれる高さ 11.1cm の女神像もある(1908 年、ヴィレンドルフ・ウィーン自然史博物館蔵)¹³³⁾。

原始人によって作られた女性の「神」は「改造」していない原型のままのものがある一方、女性の生殖パワーが強調されたものもある。磁山、裴李岡、仰韶諸文化をはじめ、ほぼ中国各地で陶器に附属した女性人像が出土しているが、その一部には意図的に膨らませた乳房、腹の突き出た妊婦の体型、また生殖器が表現されている¹³⁴⁾。現段階で最も古いとされる生育関係の女性裸像は、オーストリア、ヴィレンドルフの地で発見された「原始ヴィーナス」像である。これは旧石器時代に魚卵状石灰岩で作られ、高さ 11.1cm である(1908 年、ウィーン自然史博物館)。日本の縄文後期の「筒形土偶」は、茨城県戸立石、青森県亀ヶ岡などの遺跡から出土している。これらの一部のアジア版ヴィーナスとも言える彫刻では、いずれも豊満な女体が表象されている。

1983 年、遼寧省凌源県牛河梁出土の赤色陶製の女性神頭像は、胸部や下半身の身体特徴は表象されておらず、一見男か女か分らない。それなのに何故「女性」や「神」と認定されているか。近くでは裸体の妊婦像などが発掘され、時期的にも母系社会と判明しており、さらに遺跡は女神廟と認定されている。これらの総合解析により、「女性」そして「神」であるとの判断となった¹³⁵⁾。同じ場所には祭祀が行われた祭壇とみられる大きい遺跡があり、良渚文化の祭壇遺跡との相似点が検証されている¹³⁶⁾。紅山文化の女神像の眼球部分に嵌められている鮮やかな青色石は高度の神聖さや鋭い洞察力を表現する工夫であろう。女神廟の周囲には規則的に墓地が配置され、墓の中からは玉製猪(豚)龍が出土しており、被葬者と宗教の関係が指摘されている¹³⁷⁾。

男根崇拝のような彫刻も原始時代から作られているが、生育関係の男神廟はほとんど見られない。生殖原理がまだ十分に認識できない時代には、神秘的パワーは女性だけに存在するとされ、女性の地位の高さに繋がっていた。人類の子孫継続の鍵を持つとされた女性は、長い間家庭や部落において主導的役割を担っていた。原始時代男性は附属的で受動的な存在であった。

○漢字と女性社会

龍山文化、良渚文化における一部の原始符号は、すでに文字の準備段階にあったことを示している。紀元前3000年の浙江省平湖市林埭鎮群豊村莊橋墳の240件を超える器物から、文字と考えられる表記が発見され(2013年)、最古の文字としての認定作業が今でも続いている。

我々が今でも原始時代における母系社会の実態を解析できるきっかけは、「名字」に含まれるメッセージである。古い姓である「姚、姜、姬、妊」などの文字はいずれも「女偏」で構成される。また「母」姓には当時の女性主導の面影が残されている。一般的に名字が付けられるようになった時期は3600年前の殷時代からと考えられる。最初の王朝である夏、殷、周の始祖とされる「女媧」、「簡狄」、「姜嫄」はいずれも女性であった。音声の面においても、「女媧」の「媧」は「蛙」と同じ音であり、本文にて触れた陝西省西安市半坡、臨潼県姜寨、宝鸡市北首嶺、青海省樂都県柳湾の蛙文様の解析から、多産という豊かな生殖性能が示される媧と蛙の繁殖との関連性がこの同音からも示されている。また女媧は造人の始祖であり、誕生させられる新生児の泣き声(wa)からの借用で名付けられた可能性もある。

人間の名字を表す「姓」という文字自体も母系社会や母性主体の構造を示すものである。許慎著『説文解字』の解釈では、「姓、人所生也(姓は人の生まれを意味する)」とされているが、「女」と「生」の組み合わせから、女性によりすべての生命体が生まれるとの意味と解釈できる。また、出生の結果で、女子の誕生のみを「姓」とする解釈もできる。婚姻社会になってからも、陝西省の仰韶文化遺跡には成人女性のみが葬られ、配偶者を除外した現象は母系崇拝の社会構造によるものであろう。また女兒に関する例として、陝西省西安市半坡152号墓、同省華県元君廟429号墓、405号墓、同省臨潼県姜寨7号墓の女兒安置墓が挙げられる。これらの共通点は、多くの陶器中心の副葬品があることである。石興邦氏は女兒、少女らの社会的地位が高く、女性部落長の娘もしくは後継人の可能性があると主張している¹³⁸⁾。生産力がまだ低かった原始時代において、実用器の副葬や時間をかけて作られた墓室などは身分による優遇であるという見解が適切と思われる。

(三) 原始思想の形成

周口店北京原人は、遺体に赤鉄鉱物の粉が振りかけられており、再生に欠かせない血を象徴したと推測される。意図的な埋葬の始まりは旧石器時代晩期、または新石器時代初期と考えられる。単に遺体処理的な意味の埋葬処置もあれば、ある程度の思想的儀式が含まれる喪葬も始まっているように思われる。

○葬制、葬具の思想性

葬具の陶器に遺骨を入れ直す、また墓を替える「二次葬」や「復葬」、または「遷葬」という喪葬の実態は、黄河の上、中流域の仰韶文化の遺跡である陝西省華県元君廟の発見により確認されている。ほぼ二千年後の長江流域にも、二次葬のような埋葬方法が記録されている。今でも客家の一部の地域で行われている拾骨葬、復葬、遷葬は、現代版の二次葬である。古代の楚地の二次葬であれ現在の拾骨葬であれ、いずれも陶壺類の容器が用いられている。壺に宿るとされた生命の誕生能力や再生機能によるものと考えられる。

春秋・戦国時代の墨子の言葉に「生則見愛、死則見哀(生けるときは則ち愛を見、死せるときは則ち哀を見る)」というものがある。回避できない死に対し「哀」という悲しみしか示すことの

できないという消極的部分があるが、合理的な感情を表現している¹³⁹⁾。このような「死＝全てが終わる」との知識を、果たして原始時代に持てたのだろうか。おそらく死の現象に対する解釈は上手にできず、漠然とした「戻ってこない」という現実の虚しさと「戻ってこい」という願望を持っていたと思われる。この失望感と期待感の交差する行動が副葬品の使用であった。

河南省濮陽県西水坡 45 号墓からは遺体の両側に龍、虎の貝殻モザイクが発見されており、紀元前 4000 年の最古の「龍虎図案」と呼ばれている（1987 年、北京・国家博物館蔵）¹⁴⁰⁾。このような構図の文化的意義は、龍と虎の人間には無い「神霊力」を借り、その加護のもと「理想世界」へ上昇することを示していると考えられる。原始人は自然界の様々な現象を説明することができず、実在する動物や人間の力を遙かに超える神霊性類の動物の存在を意識し始めた。空想動物を生み出したのも、地下世界を賑やかにさせたのも人間自身である。鳳凰の原型である孔雀は特に沿海地域諸文化には多く伝わっている。鳥表象を重んじた北方の黄河下流領域の大汶口文化、龍山文化、南方の長江下流領域の良渚文化、河姆渡文化では鳥彫刻が他地域より数多く作られている。また、大汶口文化、良渚文化の両者間の陶器、玉器符号との関連性も指摘されている。それら多くに見られる共通点について「偶然の現象では絶対あり得ない」と李学勤氏は述べている¹⁴¹⁾。交流による文化の繋がりがあったと推察できる。このように喪葬文化の原始時代の濫觴期においてすでに思想的内容が形成されていた。自発的に幻想世界を設計するに伴い、喪葬文化は充実していった。

○「以玉事神」

原始時代の思想分野において玉の役割は非常に大きい。玉に神秘性を感じ、崇拜の対象として神聖化させた。貴なる人と賤なる民衆が区分された原始時代晩期において、階級や権威が擁護、強調される道具として玉が選ばれ、大いに用いられた。玉製品を加工する道具が限られた時代において仮面や人体彫刻の加工は大変な作業で、途中で失敗するケースも多かったと思われる。玉が執拗に愛用された理由は、身分の証となる権力関係と密接な繋がりがあったことと「以玉事神（玉をもって神に仕える）」¹⁴²⁾との崇拜によるものである。

原始時代は多くの器物に実用性が求められたが、芸術性や象徴性を追及する動きが活発でない中、玉琮が多く登場していた。生活する地から「通天（天と繋がる）」ことが表現された琮の均等な造形は、「天円地方（天は円く、地は四角い）」ということを喩えているとする見解が一般的である。玉琮の構造について前漢・劉歆著『周礼』には「琮之言宗、八方所宗、故外八方、象地之形。中虚円、以应無窮、象地之德、故以祭地。（「琮」または「宗」ともいう、八方から内に向かい、故に八角形を外とし、地の形に喩える。中を円形にすることにより無窮を意味し、地の徳を喩え、故に地を祭祀する。）」と記されている¹⁴³⁾。琮は点、線、面の組み合わせによる幾何的構図となっている。この構図には農耕民族の感覚が示されており、農耕地の外形および計算によって培われた認識との結びつきがあったと思われる。琮の発見地、使用された場所は例外なく土地を耕す地域であった。例えば、殷周時代の四川省成都市金沙遺跡の高さ 16.6cm の玉琮である（2001 年、成都市文物考古研究所蔵）¹⁴⁴⁾。

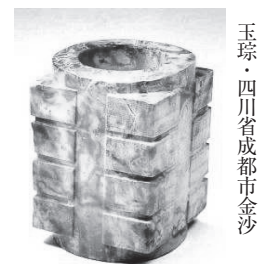


図 36

玉琮・四川省成都市金沙

長江流域、特に下流域の遺跡では玉琮が多く発見されている。良渚文化の江蘇省武進県寺墩、またほぼ同じ地理環境の薛家岡文化の安徽省潜山県薛家岡の玉琮などは、現段階で最古のものと



図37 幾何文琮・上海市青浦県

されている¹⁴⁵⁾。良渚文化、薛家岡文化はともに当時の中国の中で高い文化水準を保持していた。上海市青浦県福泉山の複数の幾何学的な凹凸の造型からなっている玉琮は目を引くものである(1982年、上海博物館蔵)¹⁴⁶⁾。玉琮の中には人間関連のものがあり、人の姿の登場が少ない時代において極めて貴重で、玉琮という特殊な器物の性質とともに重要な意味が込められている。

浙江省余杭県反山12号墓出土の良渚文化(約前3300～前2250年)の玉琮の胴部には人間の姿が彫られているものがある(1986年、浙江省博物館蔵)¹⁴⁷⁾。また重さ6.5kgで玉琮王と称される最大の玉琮と、権力象徴の玉鉞王と称されている鉞が同一墓から発見され、墓主の高い身分が示されている。

良渚文化の江蘇省武進県寺墩1号墓からは高さ5.4cm 孔径4.6cm(1978年)、また同遺跡の寺墩4号墓からは高さ7.2cm 孔径6.7-6.9cmの玉琮が出土している。琮の上部には冠を被る人面文様があり、下部には獣面、人の両手、動物の両前足が表現されている(1982年、南京博物院蔵)¹⁴⁸⁾。個数が少量で丁重に作られた良渚文化の玉琮人像は端正な造形に加え、複雑な文様が施されている。これらの文様は部落のトーテムとの関連性も考えられる。神人や獣面の煩雑な文様の二重表現で、所有者や崇拝を含む行事の対象者との関係が表わされている。この獣面文玉琮からは天、地、人間の関連性が示されていると考えられる。



図38 獣面文琮・江蘇省武進県寺墩

玉琮の使用者や所持者は、社会的に重要な地位で、指導的立場に居たと考えられる。副葬品として玉琮は、遺体の頭部や上半身の近くまたは腕に通されていたり、あるいは足の近くに置かれていた。玉琮は原始時代からすでに神の代言者の道具の一つであった。この時代は部落民を弾圧するなど極端な手段で権力を強化した時代ではなく、このような高級工芸品が、神霊への賞賛や部落の首領への敬意を誘導するのに使われた。玉琮を通じて少数の人物を神格化させたことは、被支配階級の服従心を生み出すための有効なプロセスであったのだろう。林巳奈夫氏は良渚文化の玉器には文字起源と関わりのある符号が存在していたと指摘している¹⁴⁹⁾。氏の逝去後の発見もその見解を裏付けている。

○凌家灘玉人像

安徽省含山県銅閭鎮凌家灘にある含山文化の遺跡からは、前3000年前後に作られたと思われる玉製の全身人像が出土した。これは高さ8.6、幅2.4、厚さ0.8cmである(1998年、安徽省文物考古研究所蔵)¹⁵⁰⁾。完成度の高い人体彫刻品は多くの謎に包まれているが、原始時代の人体彫刻品解明への大きな一歩となる可能性がある。

人体表現、特に完成度の高いものが極めて少ない原始時代において、凌家灘では合わせて6体の人像が発見されている。新石器段階の生産水準、加工具や技術などから、表現力の高い彫像は稀である。玉という贅沢な素材が選ばれ、一体ずつ精力をかけて丁寧に表現されている。作られた人間形象のモデルは、玉の使用者と同じく特別な身分の存在であろう。地位のある墓主の形象

とも考えられる。凌家灘人像の両肘を曲げている姿は服従心の表現か、ある特定の対象に祈る表象であろう。「縦梁冠」と呼ばれる丸い冠式に彫られた垂直線は、農業との関わりが密接な太陽の光線であるとされ、神格化された「冠」と思われる¹⁵¹⁾。内モンゴル陰山山脈の狼山地区の岩画にも同一の冠が表象されている¹⁵²⁾。凌家灘出土の玉製鳥には、翼に象の様な動物の横顔が表わされている。鳥の胸部に刻み込まれて

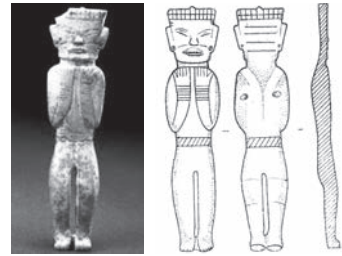


図39 全身像・安徽省含山県凌家灘

いる二重円、またその中に八つの三角形を施すことにより太陽の形状、射線を表象していると考えられる。



図40 頭部装飾・内モンゴル陰山

凌家灘玉人像と同時期の、長江流域の浙江省余杭県良渚、また黄河流域の山西省襄汾県陶寺などの城壁や宮殿などの遺跡は都市の形成を示している。また山東省鄒平県苑城鎮丁公では城壁が発見されている。城の中には約100棟の屋敷の跡が確認されている。面積が50㎡を超す大型もあれば、10㎡に足りない住居もあり、貧富の差が鮮明である¹⁵³⁾。凌家灘遺跡における出土品は、ほとんどが大、中型の墓の副葬品で、玉器のほか銅器の簋、爵などが発見されている。これらは少数の権力者に独占された。さらに直径約3.9cm～4.4cm、厚さ0.2cmの、角2本があり目が丸く背びれの刻まれた環形玉龍なども発見されている(1998年、安徽省文物考古研究所蔵)。

凌家灘玉人像や龍像作りの造形理念や方法には、他地域との接点があったようである。安徽省から1500km離れた遼寧省凌源県牛河梁でも類似する環形龍や人像などが発見されている(遼寧省考古研究所蔵)。複数の煩雑な造型や動態の酷似は、偶然ではなく南北交流網の形成によるものと言えよう¹⁵⁴⁾。多くの発見品により凌家灘の時代の先進性がはっきり示されている。このように玉人像などの作品から、原始時代の階級形成の兆しが現れ、初の王朝の誕生がそう遠くなかったことが伺われる。史前期の原始時代がいよいよ終わりを告げようとしていた。

三. 殷周時代の人像

殷代からは人像を作る意欲が前時代より強くなり、都の安陽などの墳墓から出土した俑は、濫觴期の原始時代から一歩前進し、何を表現したいかという制作目的が鮮明となった。本節では殷・周時代俑文化の思想背景、人間の自己認識の変貌、そして俑を含む人体彫刻品の諸問題を中心に取り組んでいく。

(一) 人間崇拝の必然性

○鬼神から人間へ

孔子思想が多く反映される『礼記』の「殷人尊神、率民以事神、先鬼而後礼。(殷の人々は神を尊び、民は率先して神事を行い、礼儀より鬼神を祭ることが優先された。)」からは、殷時代の鬼神崇拝が伺える。一方で殷代以降は鬼神に縛られない開放性が見られるようになった。王侯や貴

族などの個人権力者による統治力が大きくなるにつれ、鬼神や自然、動植物崇拝に頼る志向は弱くなっていった。崇拝、祭祀の対象に人間が多くなり、現職の王の先祖の祖先神が頻繁に登場している。殷王の祖先、現職殷王、占い師（貞人）といった少数の統治力が現実社会で正当化され、重んじられた。人間崇拝の方が具象性が高く、崇拝者がより多く集まった。人間の支配的存在がより強化されても、完全に鬼神から人間へと取って代わったのではない。鬼神、自然、動植物崇拝が依然として思想形態の一部にあり、融合し合っていた。『列子』には、「越之東有輒沐之国、…中略…其大父死、負其大母而棄之、曰、鬼妻不可與同居處。（越の東に輒沐という国があり、…中略…ある人の祖父が死亡し『鬼』となったので、その孫は祖母を背負って捨てた、鬼の妻とは同居できないからである。」と述べられている¹⁵⁵⁾。先祖が死んだ時点で鬼になるという概念が殷代以後すでに定着していたことが分かる。

○人間関係の占い

現段階で発見された15万枚超の殷代甲骨文字の内容はほとんどが占いである。政治、生産などの分野を神からの意思、指示に委ねる社会であったことが伺える。各時代の祖先神祭祀に関する卜辞は、概算で17000句を超えている。殷代の思想を反映する『尚書』には「先王有服、恪謹天命（先王は道德があって、謹んで天命に順ずる。）」とあり、その「天命に順ずる」「先王」だからこそ、徳があるとしている¹⁵⁶⁾。殷以前では虚しい「天命」の実行者が誰なのか実に曖昧であった。しかし殷代となり諸先王が天命の使者、化身として定められた。政権の正統性を主張した統治階層がある一方、官、民においてはともに「天不可信」という動きも現れるようになった¹⁵⁷⁾。占いは王侯貴族など少数の特権階級の地位を強化するためにあり、先王の意志として発信することで、自らの地位も強固なものとしていた。その結果として処刑、犠牲など残忍な行為が正当化され、多くの捕虜や奴隷の犠牲を生んだ¹⁵⁸⁾。

○神の意志への問いかけ

四川省広漢市三星堆で出土した高さ262cm、幅64.1cm、奥行57cmの人体像はその動作から占



図41

い師と思われる。像の両手が空洞の構造となっていることから、湾曲した儀杖のようなものを持つ表現であったと考えられる。同遺跡や同省成都市蘇坡郷金沙村の出土物に象牙が多くあること、そして人間が胸に象牙を抱いている線刻玉製品からも、地域の象牙への愛着心を伺える。先に述べた儀杖も象牙製の可能性がある。同遺跡からは高さ15.6cm、底の直径9.8cmの「祭祀座像」と呼ばれている銅製跪座人が発見されている。人物は薫炉くんろと見られる器物を両手で掲げている（1987年）。火炎を喻えた高台に正座しており、これは占い師あるいは祭司の祭祀の一場面と考えられる。またこの三角型台座は三星堆の辺りに聳え立つ山の地形を表す象徴する可能性もある。金沙村からも

同種の人像造型が発見されている。腰まで垂らし束ねた辮髪で、ベルトには祭典の進行を発令する祭司用の棒と思われるものを斜めに挿している（2001年、成都市文物考古研究所蔵）¹⁵⁹⁾。

甲骨文字を用いた占いは、亀の甲羅と牛の肩甲骨の平らな表面に問いかけるテーマを刻んで焼き、人間の意志とは無関係にできた亀裂を「天の意志」と解釈し、結果を発表するという流れである。甲骨文字を刻むことや占い自体は密室での行為あり、「問いかけ」と言っても理想的結論を

得るために作業を繰り返すこともあった。占い結果の記録などの行為も特権階級者またはエリートにしかできないことで、その解釈権を持つのはやはり特別な人間であり、その地位は彼らに独占され、一般民衆は参加できなかったと思われる。実際に希望する結果が出るまで占い続けることは客観性に欠ける行動であり、人為的操作と言えよう。占い師は王侯貴族同等の人間でありながらも神と庶民の中間点に立っており、半神半人のような指導者に並ぶ存在である。神意の代弁者としての絶対的存在であった占い師が、どれほど社会的に尊敬されたかが推測できよう¹⁶⁰⁾。人間が神の「意思」に指導、支配されながらも、神そのものが登場するわけにはいかなかった。神のお告げを現世の人に伝え、凶か吉か判断できるのは占い師だけである。その神からのお告げに従い、祭祀、国政、農作などのあらゆる分野において社会への指示を行った。これは、原始時代の個人による自発的な悟りとは抜本的に異なり、少数派の占い師の意思や判断に基づき、民衆は受動的に行動することとなった。占い師は目に見えない神と人間の架け橋となった。これら人間による宗教活動は、殷時代の政権を長く支えた要因の一つである。人類初期の多種多様な崇拝や漠然とした宗教行事による原始時代晩期の部落の首領や殷代の占い師による神の意志への問いかけは、次第に人間崇拝へと転換していった。同種の人間を敬讃することは権威の形成と最も密接なつながりがあり、人間本位の思想形成にとって促進力となったのは明白である。

(二) 人間認識の動向

原始時代、自然、猛獣、神霊の威力を信じるのは、人類の本能的な力がどうしても及ばない対象への崇拝心理である。人間自身の力の増大や支配範囲の拡大により、題材として人間自身の登場が増えていった。

○銘文と政治活動

殷時代の青銅器に铸られた銘文は 10 文字未満がほとんどである。その多数が持ち主の氏名で、一部は祖先や祭祀対象を指すことが判明している。前漢・戴徳ら編『礼記』には「夫鼎有銘、銘者、自名也、自名以称揚其先祖之美、而明著后世者也。(鼎に銘文があり、銘とは自分の名であり、自分の名を以て其の先祖の美德を顕揚し、そして後世の者にも示す。)」と記されている¹⁶¹⁾。また「誰が誰のために彝器を作る」などの目的が表されるものもあり、祭祀のため作られたことが分かる。これは祖先王に関連する内容であり定型化している。社会情勢の変動が激しくなるにつれ、殷王朝の歴代統治者は先祖を祭祀することが何より有効であると認識し、莫大な情熱を注ぐこととなった。西周時代初期から銘文は記録の道具として強化され、字数の増加や内容の充実が図られた。西周時代初期の陝西省岐山県礼村山土で出土したとされる天亡簋^{てんぼうき}には武王が父の文王を天帝として祀り、行事の貢献者である「天亡」という人物に褒美を賜り、「その恩賞を記念してこの器を作った」という内容が示されている(1844 年、北京・国家博物館蔵)¹⁶²⁾。恩賜を記載した文面であるが、銅器の所有者にとっては自身の戦功や王から褒美を頂いた名誉を宣伝する効果もあった。西周時代中期以後は「子子孫孫永寶用(永遠に子孫代々に至るまで大切にせよ)」の決まり文句がよく使われるようになった。周夷王時代(前 885～前 878 年)の銘文はさらに「其子子孫孫万年永寶用」となり、西周時代晩期まで続いていた¹⁶³⁾。銘文は事件などの出来事の記録である一方、先祖や子孫との継承関係さらに上下身分などの政治関係についての記録でもある。

○人間認識と表象

初期の人体関連文字はどの文明圏でも人の輪郭線で表すものが多い。概算で3700字ある甲骨文字の内、ほぼ7分の1は人体に関係している。殷代誕生の甲骨文字「天」、「王」字は人間の正面の姿であり、「乙」字などは側面からの姿で、頻繁に登場している。固い媒体に刻む甲骨文字に対し、柔らかい泥の模型に書かれる同時代の金文は滑らかで絵画の要素がかなり残されている。人体の描写が文字の一部となるのは、人間自身を重んじるようになった結果であることは間違いない。文字構成について藤堂明保氏は「夏」字を解析し、「鎧をつけた大きな人間」の形という仮説を立てている。軍事国家の性質を有していた夏王朝の実態との密接な関わりが伺える¹⁶⁴⁾。銘文の終わりによく見られる「子々孫々永寶用」の「子々孫々」は人体由来である。「主」や「臣」のような主従関係の文字も、同じ人体やその一部を用いて表わされている。「臣」は目の形が借用されたが、微笑みを含む目ではなく、厳しさを表す縦目が選ばれた。これは、民衆を監視する表象であると思われる。「立」字は人間正面の静止した姿を表わしているのに対し、「到」字は場所を移動する人間に由来している。造字に人体やその動きが大いに関わっていた。



「夏」字



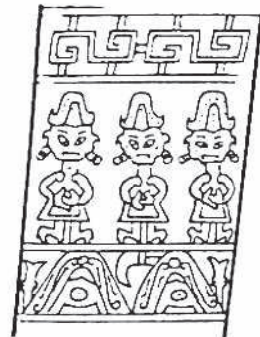
「臣」字



「子」字

○人像表現の多様化

徐良高氏は殷・周時代の人像を神人像、人頭像、人獣結合像、男女結合像、人頭像、立体人物彫像に分類している¹⁶⁵⁾。「神人像」とされる人像には、人頭像、人獣結合像もあり、男女結合像にも神人像類がある。徐氏は対象物の交錯や重複を網羅できておらず、実例の多くは他のカテゴリーにも重複して所属するものを、特定のカテゴリーのみに所属させることで、結果として多様性が希薄になってしまう。また神人像の分類から祭祀や天候などを予言する占い師が外れている。民衆や場合によっては王の行動まで主導する存在の占い師は神との交流の架け橋である。その形象になぜ触れていない



玉璋文様・四川省広漢市三星堆

図 42

のか。徐氏が論文の中で例として取り上げたハーバード大学フォッグ美術館所蔵の安陽殷墓出土とされる高さ9cmの玉製立像は、斜面形の高巾帽を被り両手を腹前で交差し、深衣式の長衣で蔽膝を身に着けている。その服装や厳正な表情は、占い師と考えられる¹⁶⁶⁾。

殷代、人像の素材は河南省安陽市殷墟をはじめ、主に陶、銅、玉製の三種類に分けられる。後代の主流となる安価な陶製は少なく、人体彫刻品の製作にはまだ技術的問題が残っていた。最も多いのは銅製で、国王や貴族をモデルとしたと思われる銅製人像が殷墟に散在している。婦好墓から出土した十数個の玉製俑は、華麗な衣服を着用し手を膝に乗せて正座をしている。また婦好本人をモデルに作られた厳粛な表情の彫刻もある¹⁶⁷⁾。四川省広漢市三星堆2号祭祀坑出土の玉璋には、占い師や祭祀師など宗教関係と思われる人像が刻まれ、端正な姿や敬虔な表情で神様への誠意を表現しているようである(1986年、四川文物考古研究所蔵)¹⁶⁸⁾。

独立体の人体彫刻品として、この時代で最もリードしているのは、四川省広漢市三星堆遺跡の銅製人像であろう。彫刻の表面に残っている焼け跡は、甲骨文字を用いた「燎祭」と考えられる。人像の力強い角、大きな目玉、開けた口の表現は、同時代の中国各地の作品を遙かに超える

山字形髻人像・陝西省宝鶏



図 43

レベルである。誇張された四川省広漢市三星堆の銅製人像、高度の写実性を持つ成都市金沙遺跡の跪座人像などからは誇張的な想像（抽象）と記録（写実）が混在していた時代の特徴が伺える。西周時代の陝西省澧西県墓出土の玉製高冠人頭像（1985 年）¹⁶⁹⁾、同時代の陝西省宝鶏市茹家庄 2 号墓出土の「山」字形高髻の青銅製舞人像（1974 ～ 75 年、宝鶏市博物館蔵）¹⁷⁰⁾などは、西北地域の人像の代表作品である。また、婦好墓出土の 15 体の玉製人像は、長髪を編んで頭の上部に巻き上げ、手を膝にのせ正座する姿である。特に高級素材黄玉製の人物像は、婦好本人をモデルにした俑と考えられる¹⁷¹⁾。玉製品嗜好の風潮は『逸周書』の「商王紂取天智玉琰五、環身厚以自焚。…中略…焚玉四千。（殷王の紂が天智玉を身付けて焼身自死した。…中略…紂王の玉四千が焼き捨てられた）。」ということにも示されている¹⁷²⁾。

陝西省宝鶏市虢川司で発見された「^{かくき}虢季子白盤」に刻まれた 110 文字の銘文には、周宣王十二年（前 816）年、虢季子白が洛河北側で玁狁部落に大勝し、周の宣王が敵を 500 人殺し 50 人を捕虜にした功績を称え、虢季子白を宴でもてなし更に馬、弓矢、斧鉞などを恩賜したと記されている。恩賜が与えられ、記念する目的で虢季子白盤が作られたのは明らかである（清・道光年間〔1821 年～ 1850 年〕出土、北京・国家博物館蔵）¹⁷³⁾。

民族の攻防に関連する人像作品もあり、戟や剣などの兵器に付属する例が挙げられる。甘肅省靈台県白草坡 2 号墓で発見された西周時代の人頭^{きょうこうき}盞鉞の兵器には濃い眉と大きな眼、髪の毛を垂らし、頬には刺青のようなものが描かれている。この種類の文様は、北方から伝わってきたとされる（1972 年、甘肅省博物館蔵）¹⁷⁴⁾。髪型は内モンゴル赤峰市巴林右旗出土の石雕人像と似ており、非華夏系民族と思われる¹⁷⁵⁾。華夏族が非華夏系民族を作ったか、または非華夏族の自作なのか、発現地の河西回廊は東西交流の通路でもあり非華夏族が自作し流入した可能性がより高い。シルクロードが開通されていない漢代以前、すでに断続的な一部地域での東西、南北交流が始まっていたことが人像の実例からも証明されている¹⁷⁶⁾。



盞鉞人頭像・甘肅省靈台県

図 44

（三）人像作品の観察

○器物との一体表象

前時代と比べると、殷・周時代の人体彫刻品は銅器中心の金属器物に付属した構造が多くなった。表現対象がより巧妙に構成されており、一つの主題内容を示すものもあれば、主題、副題が同時に存在するものもある。原始時代の随意的で粗末な作り方から、より明確な目的を持ち表現内容を顕著にしようとした。また宗教関係の厳粛な気風が漂う作品が多くなった。媒体依存の人像、つまり附属式人像彫刻などが主流である一方、独立式の人体彫刻品も断片的に作られるようになったのは、この殷・周時代の最も大きな変化として挙げられる。

まず、伝統の付属式の人面、人体の代表例をまとめる。

殷代

人頭像、出土地不明、刀に施されている。玉製¹⁷⁷⁾。

人体像、出土地不明、竿頭の上に彫られている。青銅製(天理参考館蔵)¹⁷⁸⁾。

人面盃、伝河南省安陽市出土、青銅製。真ん丸の瞳が表現されている。目、鼻、口が大きく作られ、歯が出ており笑っている表象。耳の下部には穴があり、装身具が付いていたと思われる(フリーア美術館蔵)¹⁷⁹⁾。

人頭像、陝西省西安市老牛坡出土、青銅製、3件(1986年)¹⁸⁰⁾。

出土斧に施された人頭像、陝西省洋県と城固県など(1950年代)¹⁸¹⁾。

人面夔神像、出土地不明、太鼓の側面、鼓面にワニ皮のような文様があり、太鼓の側面で両手を挙げて足を踏ん張る人像が表象されている(泉屋博古館蔵)¹⁸²⁾。



図45 人面文鼎・湖南省寧郷県黄材鎮出土

人面文鼎、湖南省寧郷県黄材鎮出土、青銅製、鼎の内側には「大禾」の銘文が铸られ、器の腹部には丸い人間の顔が表現されている(1959年、湖南省博物館蔵)¹⁸³⁾。

西周時代

人頭像、陝西省武功県武功鎮鄭家坡出土、陶製¹⁸⁴⁾。

人頭像、陝西省岐山県京当郷鳳雛村出土、玉製。髪を束ねて高く髻を結つ



人頭像・陝西省武功県

図46

た人の顔面。腰に吊るしたものは装飾品と思われる(1980年)。

変形人面飾、陝西省澧西県出土、玉製(1984～85年)¹⁸⁵⁾。

変形人面飾、陝西省長安県張家坡17号墓出土、玉製¹⁸⁶⁾。

「人頭形玉飾」と称される人面飾、出土地不明(上海博物館蔵)¹⁸⁷⁾。

人足盃、山西省曲沃県天馬一曲村北趙晋侯墓出土、青銅製(1993年、山西考古研究所蔵)¹⁸⁸⁾。

方座円筒形器、山西省曲沃県天馬一曲村北趙晋侯墓地出土、銅製(1993年、山西考古研究所蔵)¹⁸⁹⁾。

裸体男性形象、山東省臨朐県出土、銅製、3体。盤の足部分に表されている¹⁹⁰⁾。

刖刑門番像、出土地不明(故宮博物院蔵)¹⁹¹⁾。「刖刑^(げつけい)」という足を切る刑罰が西周時代から増えている。刖刑の人像は全て青銅器の附属部分である。山西省聞喜県上郭村7号墓出土の刖人守園挽車像は、刖刑を受けた裸の人物が左手で杖をつきながら右脇にかんぬきを抱えて門番をしている。青銅の車は、全体で園とよばれた当時の動物飼育園を再現したものと考えられる。箱形の車の前方には扉があり、その脇に刖刑という刑罰を受けたため左足のない人が、左手で杖をつき右脇にかんぬきを抱えて裸で門衛をしている。箱蓋には座っている猿と回転できる4匹の鳥、箱の側面には鳳凰の浮き文様のあいだに伏獣が6匹、さらに最下部に虎が車輪を抱えている(1989年、山西省考古研究所蔵)¹⁹²⁾。

刖人守門像方形鬲、陝西省宝鸡市茹家庄出土、扉に立っている男性門番の左足、右手は欠けて

変形人面飾・陝西省長安県



図47

おり、刖刑を受けた者と考えられる。開閉できる扉から炭火を入れて実際に食べ物を加熱できるようになっている（1988年、宝鶏青銅器博物館蔵）¹⁹³⁾。

刖人守門像、方形鬲、陝西省扶風県法門郷莊白村1号窖（穴倉、むろ）藏坑出土（1976年）¹⁹⁴⁾。

刖人守門像、方形鼎、内モンゴル寧城県小黑石溝8501号墓出土（1985～98年）¹⁹⁵⁾。

○単体の表象

殷・周時代の独立人体彫刻の多くは、政治、文化中心地から出土している。

殷代



人体像・河南省安陽市婦好墓
図48

人体像、玉製、高さ10.3cm 幅3.5cm。「人物は冠を付け、両耳には耳輪を付けており、その中心には孔が開いている腕を腹の前に組み、腰に短いズボンのようなものを着ける」（上海博物館蔵）¹⁹⁶⁾。

人頭像、河南省鄭州市上街出土、陶製（河南博物院蔵）¹⁹⁷⁾。

人体像、安徽省含山県大城敦出土、陶製¹⁹⁸⁾。

人体部分像、河南省安陽市殷墟小屯大連坑331号墓出土。「人体の半分が残っている。足を抱え込む人像」と記録されている（1929年、台湾・中央研究院歴史語言研究所蔵）¹⁹⁹⁾。

以下の遺物の出土地はいずれも殷墟周辺の河南省安陽市である。

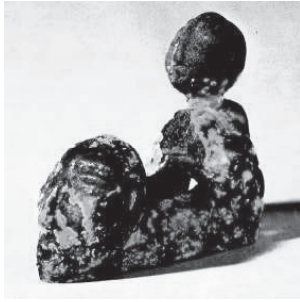
人頭飾、小屯331号墓出土、玉製。「人物の横顔を表現した玉器で、首、顔面、冠で構成されている。首は細長く、頭上には羽冠を戴き、顔面は浅い浮き彫りで目や口などを表現している。10cmにも満たないサイズだが、玉の材質・彫刻技術・意匠表現とどれをとっても高水準の貴重な資料である。」²⁰⁰⁾とされている。明らかに表現対象は普通の人間ではなく、長期に渡り定着していた側面の表現を採用しているが、本作品の玉素材の加工技術の制限による形状かもしれない。頭部の装飾は特に注目されている（1937年、台湾・中央研究院歴史語言研究所蔵）²⁰¹⁾。

殷墟第十二回の発掘で小西北岡1550号墓より戴冠跪座人が出土した。人像に施された玉飾は「形式の極めて複雑な高冠の輪郭である」、「冠の前が高く、後ろが低く斜めになっている」とされている（1935年、台湾・中央研究院歴史語言研究所蔵）²⁰²⁾。殷墟第十五回の発掘で小屯WH358号窖からは「殷代の陶俑が数体出土し、二種類に分けられる。髪の毛が無く腕が後ろで縛られたタイプと、髪の毛があり腕が前方で縛られ、両手とも手錠がかけられているタイプである」（1937年）²⁰³⁾。これらは極めて貴重な資料で、有識者には大いに注目されている。しかし、発見された「窖」は「貯蔵用の穴倉」と定義されているため、墓出の「俑」と呼ぶべきかについては検討する余地が残っている。



手錠俑・河南省安陽市小屯
図49

仮面具23件、陝西省固城県蘇村出土、銅製。報告書には「形状は円形と隋円形の二種類があり、耳の形も長方形と隋円の違いがある。」と書かれている²⁰⁴⁾。政治や経済の中心地から離れているこの陝西省漢中地区からの発見は珍しい。威圧感のある人像造型は、江西省新干県大洋洲墓の仮面具、山東省青州市蘇埠屯1号墓の鉞との共通性が多く見られる。婦好墓から玉製人体彫刻品15体が出土している（1976年）²⁰⁵⁾。人体形飾、青海省湟源県大華中莊出土、青銅製（1982年、



人体形飾・青海省湟源県

図 50

青海省湟源県博物館蔵)²⁰⁶⁾。日本で開催された「大英博物館所蔵 日本・中国美術名品展」の展示品の中には、殷代後期、西周時代初期と思われる玉製人像がある。衣装などから位の高い人間像ではないかと思われる²⁰⁷⁾。立ち上がる途中の動作を表現しようとしたのか、両足がまっすぐになっていない設計である。

西周時代

人体像、河南省洛陽市東郊鉄鋼工場墓出土、玉製²⁰⁸⁾。

人頭像、陝西省豊西県墓出土、玉製(1985年)²⁰⁹⁾。

人頭像、河南省三門峽市 2001 号墓出土、玉製(1990年)²¹⁰⁾。

人体像、陝西省扶風県齊鎮村出土、青銅製、短剣の刃上部に目が大きい人間像が鑄られている(1971年)²¹¹⁾。

黥面人頭像、甘肅省靈台県白草坡墓出土、青銅製、鎧の一部分に彫られている²¹²⁾。この「黥面人」は被征服者を意味し、勝利者を賞賛する意味が含まれているのではないかと²¹³⁾。また、この地域に隣接する騎馬民族の人間を指す可能性もある²¹⁴⁾。

人体像、甘肅省靈台県白草坡墓出土、玉製、27 件(1967 年)。高さ 7.9cm の黄色玉製人体像には、四本の刻文がある。「四肢が縛られているようである」と報告書作成者が語っており、また「M2 出土の玉人像は捕虜となった敵首領であろう」とも推測されている。このような捕虜をモデルとした像は、捕虜献上による記念の意味か、あるいはある種の巫術的表現かもしれない²¹⁵⁾。

人頭像、甘肅省靈台県白草坡墓出土、銅製、顔にコーカサス人(現ロシア・ダゲスタン共和国あたり)の特徴がある²¹⁶⁾。

舞人像、陝西省宝鶏市茹家庄 2 号墓出土、玉製(1974 年)²¹⁷⁾。

人頭像、陝西省岐山県京当郷鳳雛村出土、玉製、目を見開き、口は円形で、髪を束ねている。腰部に吊したものは装飾品であろう(1980 年、宝鶏市周原博物館蔵)²¹⁸⁾。

人体像、山西省翼城県大河口 1 号墓出土、木製、漆塗り、1.0m くらいで良い保存状態である(2007 ~ 2008 年)²¹⁹⁾。

人物龍鳳獸面飾、陝西省長安県張家坡 157 号墓出土、玉製²²⁰⁾。

人体像、山西省曲沃県天馬一曲村北趙晋侯墓地出土、玉製(1993 年)²²¹⁾。

人体像、陝西省韓城市梁帯村 502 号墓出土、木製(2005 年)²²²⁾。

人頭像、陝西省扶風県石陳出土、ハマグリ製。帽子を被っており、右頭部前側の平らな表面に字が彫られている。顔が長く鼻が高いことからヨーロッパ系と思われる。西域との文化交流が裏づけられている(1980 年)²²³⁾。

馬具の軛飾、陝西省宝鶏市茹家庄墓 1 号車馬坑出土、銅製。獸頭の裏側に小柄の人物がしがみつような姿で鑄られている。『史記』

人物龍鳳獸面飾・陝西省長安県

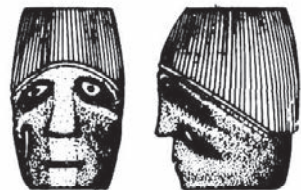


図 51



人頭像陝西省扶風県

図 52



に、「穆王伐犬戎、得四白狼四白鹿以歸。(穆王が犬戎を討伐し、四頭の白狼、四頭の白鹿を獲得して持ち帰る。)」と記されており、人物像の背中に施された鹿の表現はこの戦いを記念して作製された可能性もある²²⁴⁾。

○特殊な表象



跪座人体像・河南省安陽市
図 54

河南省安陽市殷墟
婦好墓から出土した



獸付属人像の背中文様



図 53

車飾人体像陝西省宝鸡市

跪座像には文様が施され、華麗な衣装をまとっている。特殊な髪型は同じ長さに揃えてあり、端正な印象である(1976年)²²⁵⁾。成都市青羊区金沙村からは12体の石製俑が発見されている。この中の6体は短髪の男性像で、跪座で神霊への祈祷や献上などの誠意を示す内容と思われる。かつて殷王湯は「剪其髮」を行って短髪となり、自ら桑林で祈りを行ったとされている²²⁶⁾。人々の神

への敬いの心を強化させると同時に、首領の犠牲精神を感じさせ、結束力を高めようとした。6体の正座姿の剪発人像の縛られた姿は非常に印象的であり、対象者の身分や表現の真意が議論されている。縛られた者は身分が高い特権者と見られ、自然神への誠意を示すための自虐的行為であろうか。天帝に雨を降らせてもらい、自然災害から救済してもらうための宗教的行為と考えられる(2001年、成都市文物考古研究所蔵)²²⁷⁾。



自虐俑・四川省成都市金沙

図 55

紀元前7000年の裴李岡文化における文字が河南省漯河市舞陽県賈湖村で発見された。象形的な構成であり、その優しい横目で眼を表し、脅威などは感じられない(2003年)²²⁸⁾。殷代の甲骨文字、特に金文の「目」字の表現には、誇張した厳しさが表象されている²²⁹⁾。四川省三星堆の仮面も目の表現に特徴があり、宗教的厳粛さが含まれている。殷代の甲骨文字、金文の「臣」の字には脅迫、支配、監視の意味が込められている。許慎著『説文解字』では「臣、牽也。事君者、象屈服之形。(臣は、引くとの意味である。君主に仕える者で、屈服する姿を喩える。)」と解釈されている。「臣」字の原型は縦目であり、庶民を管理するのは確かに大臣の役割であり、人間の役割まで表す造字法は実に興味深いものがある。



陰山山脈の狼山辺りの岩絵は殷・周時代から始まり、清時代まで続いた。どの地域の岩絵も著しい進歩は見られないが、これは岩絵のある山間部地域は外部との交流が少なく、文化の発展が遅いためである。岩絵の人像は顔の内容がほとんど表わされていない。人体の輪郭線しか描かないのは、原始的な加工工具で固い岩にレリーフで表現することが難しいためである。

三星堆、金沙遺跡は殷・周時代において広漠地域や成都地域の政治、文化の中心地であったと考えられる。遺跡から出土した玉製品及び銅製品の造型や文様からは、黄河流域と長江中流域両文化が交流を持っていたことが分かる。例えば、三星堆青銅製器物の饗饗文様の構図は、河南省

安陽市殷墟の同類物と一致しており、この文様の構成は極めて繁雑で、精巧である。偶然同時期に考案されたものとは考えられず、黄河中流域からの影響があった。同じく四川省成都市金沙遺跡からは北斗七星を意味する天枢、璇璣式の玉製器が

出土している。

春秋時代の山東省沂水県劉家店



図56 扁足方鼎の饕餮文様・河南省安陽市婦好墓

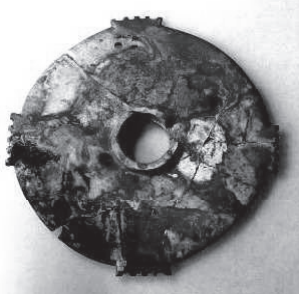


図57 璇璣器・四川省成都市金沙

の遺品にも酷似物があると判明している²³⁰⁾。河南省殷墟、陝西省周原、四川省三星堆、金沙の出土品の多くは祭祀用器物であり、器型や文様に中華文化圏の同一性が見られるようになった。また一方で殷・周時代の西南地域の四川省広漢県三星堆、成都市金沙には文化の多元性も表れている。これらの地域的特徴はこの青銅器文化の成熟さを物語っている。

四. 殷周時代の人体文様と仮面

中国が青銅器を用い始めたのは、新石器時代晩期の紀元前 3000 年以後の時期と思われる。実用品の農具、工具、生活道具も多く作られた。青銅器の文様にはデザインとして人体図案が多く採用されていた。原始時代晩期と判定された遺跡の青銅器に関しては、造形も文様も極めて単純であるが、殷・周時代に入ってからその造形、文様などのデザイン性のレベルは開花の段階を迎えた。例えば、殷墟の武丁王の妃である婦好墓だけで 1928 点の出土品があり、青銅器の食器、礼器、祭器、合わせて 460 点が発見されている。これらは量、質ともに殷代青銅器文化の頂点である (1976 年)。

張光直氏は「中国青銅時代の最大の特徴は、青銅の使用において祭祀と戦争は切り離せない。言い換えれば、青銅器は政治権力の象徴である。」と述べている²³¹⁾。青銅器の中には銅製車馬具や武器などの実用的なものもあり、戦争の記録や勝利を主導した人物を顕彰することもしばしば見られた。武器の利便性が求められると同時により記念性が追及され、鑄られた銘文から祭祀類と判明しているものもある。先王宗室などの祖先崇拝を行いながらも自身の地位を誇示し、政権の正当性を主張し、維持していくために利用していた。「子子孫孫永宝用 (子々孫々までも、永く大切に使うように)」という決まり文句には、王から授かった恩賜に感謝し、政権の長期維持などを祈願することで、君臣一体との連帯感を強化する要素が多く含まれている。

(一) 文様解読

肉食の猛獣 (猛禽) 類が草食の動物を凌駕する表象はどの時代、どの地域でも多く見られる。戦国時代の河北省中山県の王墓の「豹、虎が鹿を噛み殺している」彫像は、これを通じて中山王がその地位、権威を間接的に表していたのかもしれない。前漢時代の雲南省晋寧県石寨山墓の「虎が鹿を噛み殺している」彫像は、単に動物界の勝者と敗者を示した可能性が高い。

鸛魚石斧図陶缸河南省臨汝縣



図 58



原始時代の河南省臨汝縣閭村の「^{かんぎょ}鸛魚^{せき}石斧図」陶缸は、動物関係の代表作品として注目されている。高さ 37cm の缸の全画面を使用して絵が描かれており、現存する最も大きい陶器絵画である。灰白色の長い嘴、短い尾などの特徴から^{かん}鸛とされる鳥が、一匹の魚をくわえており、石製の斧も描かれている（1978 年、北京・国家博物館蔵）²³²⁾。嚴文明氏は「鸛部落」

対「魚部落」戦争を意味する表現であると述べている²³³⁾。陶器、青銅器の文様として魚を捕る画面は珍しいものではないが、その石斧こそ古い時代の部落間武力抗争の武器を喩えるものであろう。同じく陝西省宝鸡市北首嶺の「鷺鳥銜魚図」²³⁴⁾、陝西省武功県の「鯉魚食鳥図」²³⁵⁾も異なる集団間の争いが示されていると考えられる。

動物を捕獲すれば、人間の貴重な食材となる。鹿のような草食性類はもちろんのこと、虎、熊、豹等の肉食猛獣類も集団の力で捕えることが可能である。原始時代から狩猟者および動物の姿を岩などに描くことにより、狩猟の収穫を祈願し、祝っていた。狩猟民族の生活圏に多く見られる猛獣造形の装身具は、日々接触している動物類がもたらす食源提供の親近感や襲いかかられる畏怖心の二重心理から製作されたのであろう。

生産力の高まりにより、農耕中心の漢民族は食料確保のための狩猟は減り、貴族の娯楽へと変わった。この傾向は、魏・晋時代以後、特に唐代において陝西省乾県章懷太子李賢墓、懿徳太子李重潤墓で出土したチーター使いの狩猟絵画や俑彫刻に示されている（1971～1972 年、陝西歴史博物館蔵）²³⁶⁾。

動物対人間文様として、エジプトでは勝者を示す巨大な鳥が小さく作られた敗者を凌駕するような表現がある。主導的勢力と服従弱者をはっきりさせて威嚇感や恐怖感を表現し、味方の士気を高揚させるのに極めて効果的であった。敗者がこのように誇張した大きさの「鳥（勝者）」に圧倒され、屈辱的な立場に置かれるという構図は、殷代の人食虎文様の設計思考と一緒である。また殷代には器物表象によって国王や貴族らの軍功を顕示するため、青銅器と並んで石製や玉製の人像、人獣像などが作られていた。いずれも直接的あるいは間接的に、一部の部族や氏族への支配関係を表わしたものである。部落や氏族間、また民族間の攻防の結果を勝利者が敗北者を「食う」、「踏みつける」姿で表現した。

○部落間戦争記録としての龍虎文様

龍は空想動物の頂点であり、実在動物としては虎がこれに当たる。前漢時代の河南省南陽市の画像石墓には星に囲まれて歩いている虎の姿が描かれている²³⁷⁾。一部の動物は神聖化、絶対化されるようになり、殷代においては動物対人間題材の中で

龍虎尊・安徽省阜南縣



虎食人像・龍虎尊局部



図 59

龍虎尊の文様が代表的である。いずれも幾何学線が基本で、正方形文、三角形文、菱形文、曲線文などが中心である。安徽省阜南県月牙(砦潤)河で出土した「龍虎尊」青銅器は、高さ 50.5cm で、銘文は鑄られておらず大きく開いた口縁、張り出した肩、器型、装飾の対称的な作りとなっている。三匹の龍の下で、二頭の虎が顔を見合わせている。虎は一頭二身のように製作されているようにも見える。虎の口の下には人間像があり、頭部の半分ほどが噛まれ、両手と両足は折れ曲がっており、動けず抵抗できない状態かもしれないかしくは瀕死状態の表現であろう(1957 年、北京・国家博物館蔵)²³⁸⁾。

虎対人間姿の表現は、支配する部族と制圧される部族との対応関係を意味しているとも言えよう。人間は虎に舐められていると主張し、龍、虎トーテムを持つ部族が庇護されていると解釈している有識者もいるが、龍、虎文様よりも、人像はレリーフ式で一段ほど浅く、しかも、虎の口の真下に配置されていることから、主従関係を表すことは明白である。吹き飛ばされる雲や風のような表現は龍や虎の威圧的な君臨の姿を際立たせており、『周易』の「雲従龍、風従虎(雲は龍に従い、風は虎に従う)」の自然観が示されているとも言えよう²³⁹⁾。

原始時代晩期から東夷文化圏と呼ばれる山東省などの黄河下流域では、虎信仰の動向がますます鮮明になった。殷・周時代に入り安徽省泗県から江蘇省徐州市までの「徐夷」とも呼ばれていた広い地域でも、虎崇拜文化が形成されていたようである²⁴⁰⁾。後世に渡り長く続いている邪気払いの「虎対人間」文様の起源とも考えられる²⁴¹⁾。殷代において「虎と人間」という組み合わせは、特定の部族の桁違いの力量に大きさを意味していると考えられる。殷時代の虎食人頭像器物文様の実例は、主に以下の通りである。

司母戊鼎、河南省安陽市侯家庄西北岡 260 号墓(1939 年、北京国家博物館蔵)²⁴²⁾。

婦好鋳、河南省安陽市殷墟小屯婦好墓(1976 年、中国社会科学院考古研究所蔵)²⁴³⁾。

龍虎尊、安徽省阜南県朱寨月牙(砦潤)河(1957 年、安徽省博物館蔵)²⁴⁴⁾。

龍虎尊、四川省広漢市三星堆 1 号祭祀坑(1987 年、三星堆博物館蔵)²⁴⁵⁾。

卣、出土地不明(セルヌスキ美術館蔵)²⁴⁶⁾。

卣、湖南省安化県と寧郷県の境、(泉屋博古館蔵)²⁴⁷⁾。

河南省安陽市殷墟西北岡 1001 号墓、1550 号墓出土、石製の虎首人身跪坐像は、頭部が虎で、身体は人間の姿、両手を膝の上に置いている(1935 年)²⁴⁸⁾。

漢代の同題材の例は下記の通りである。

虎首人身跪坐像、河南省鹿邑県太清宮長子口墓(1997 年)²⁴⁹⁾。

また河南省唐河県針織廠南主室の画像石では、二頭の虎が痩せ形で上半身が裸の女性を襲っている。女性は下半身にはスカートをまとい、地面に倒れている²⁵⁰⁾。これらの二頭の虎対一人の人間の組み合わせや対称的な図案は、特に殷代の安徽省阜南県「龍虎尊」の表象や構成とよく似ている。

「虎食人」像に見られる断髪文身の文様は、南方(南蛮)より東南地方に暮らしている東南夷の姿を指す可能性があると思われる。『魏志』にも「夏後少康之子封於会稽、断髪文身以避蛟龍之害。今倭水人好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以爲飾倭人。(夏王朝の少康の子は、会稽に領地を与えられると、髪を切り、身体に刺青をして蛟龍の害を避けた。今、倭の水人は、好んで水に潜って魚や蛤を捕り、[少康の子と同じように] 入れ墨をして大魚や水鳥を追い払おうと

したが、後にはしだいに飾りとなった。）」²⁵¹⁾と、この土地の慣習が示されている。会稽は浙江省にあり、龍虎尊の出土地は安徽省の東南方面にあって、両地区の気候、環境、生産様式、生活習慣において共通点が多い。長江下流域にあたる東南地域、呉越地域の漁民は「蛟龍」の害を避ける目的で「断髪文身」を行っていた。呉越地域と対照的に、西北地域では「披髮（ばらばらに乱している髪）」が好まれた²⁵²⁾。「断髪」と「披髮」はともに異なる民族の特徴であるが、その背景にはそれぞれの地域の気候との関わりがあった²⁵³⁾。

文字が誕生しても記録性やデザイン性のある文様の共存は、人類文明史にもよく見られる現象である。自由度、随意性の高い文様より、スペース、字画により限定される文字には制約が多い。今日に至るまで使用されてきた漢字は、象形の性格を色濃く残している。殷・周時代の記録媒体の甲骨文字には人像造形や動物造形が反映されており、文字の誕生前後でも、文様として長く使用されていた。

○動物、人間結合の饗飮文

長江下流域の饗飮文を有する琮、璧、柱形器などの器物は、新石器時代の代表的玉製品である。特に良渚文化の玉琮に施された饗飮文のすぐ下に彫られているのは、王の顔ではないかと注目されている。浙江省余杭県反山12号墓出土の高さ10cmの玉製琮に刻まれた「獣面文」と呼ばれる文様は、最古の饗飮文の一つと考えられている（1986年、浙江省文物考古研究所蔵）。新石器時代晩期か、また夏時代と思われる黄河中下流域河南省偃師市出土の長さが65cmの玉製小刀には七つの孔が空いており、饗飮文が施されている。これは黄河流域の古い例であり、その時期からは北方の饗飮文使用が多くなっている（1974年）²⁵⁴⁾。



図 60

重醜
山東省青州市蘇埠屯

殷・周時代において饗飮文は主題文様として使用され拡大した。この時代に入り饗飮文は地域ごとに少々の違いがあるものの中核的な構図は定型化した。その構図を観察してみると、人間の顔面の各器官の位置は変形しておらず、鋭い牙や角などが牛や虎類から部分的に借用されており、半人半獣、または半人半神の姿である。殷代の山東省青州市蘇埠屯1号墓で発見された長さ31.7cm幅35.8cmの饗飮文青銅製鉞は両耳部分の下にそれぞれ「重醜」の二字が鑄られており、持ち主の名前とも思われる。

用途は儀仗用か処刑用のもので、初期の饗飮文器物にしては完成度が高い。目が前に出ており歯も剥き出しで、一種の圧迫的恐怖感が示されている。この類の文様がすでに人面表現の始まりであることを示してくれている（1965年）。河北省藁城県台西村で出土した青銅製饗飮文鉞の刃部素材は鉄隕石と判明している。殷代において権威象徴の性質を持つ鉞が貴重な素材で作られていることから、どれほど重要視されていたかが伺える²⁵⁵⁾。

戦国・呂不韋編『呂氏春秋』には「周鼎著饗飮、有首無身。（周の鼎には饗飮という文様が飾られ、首のみで胴体がない。）」とあり、その理由として「食人未咽、害及其身。（人を食べる時、飲みこんだ端から体中が害されてしまう。）」とある。これは饗飮文に関する最も古い記載とされている²⁵⁶⁾。さらに戦国・左思明著、前漢・劉歆編とされる『春秋左氏伝』には、「縉雲氏有不才之子、貪於飲食、冒於貨賄。侵欲崇侈、…中略…謂之饗飮。（縉雲氏に出来の悪い息子がおり、飲食や財貨を

むさぼり、身よりのない者や貧乏人まで苦しめた。…中略…そこで人々は彼を饕餮と呼んだ。）」とある²⁵⁷⁾。「饕餮」と人物の関連性についての記載として、初めて明記されたものである。『呂氏春秋』の「周鼎著饕餮」は文様の説明に留まり、その原型が人か動物かには触れていない。『春秋左氏伝』は文様を紹介せず、縉雲氏の「不才之子」を述べるのに饕餮を借用している。前漢時代成書とされる『神異経』には「饕餮、獣名、身如牛、人面、目在腋下、食人。(饕餮とは獣の名で、体は牛と似て、人面、目は脇の下にあり、人を食う。）」とある²⁵⁸⁾。また同書では、饕餮の体が牛に似ていると書かれており、動物類との関わりについて見解を示している。饕餮の顔はいまだに怪獣と描写され、文様を「獣面文」、「怪獣文」と呼ぶ例が後を絶たない。「怪獣」という言い方は、実際に何を指すか不明瞭で、その本質が捉えにくい²⁵⁹⁾。『神異経』では饕餮を「獣名」と言いながら、初めてその形状を「人面」としている。あくまでも形象の基点が人間だとしていることは大きな前進と言ってもよからう。人類は動物、特に猛獣類から力を受け継ぎ、原始時代以後、特に凶暴な動物を象ったものを道具として利用することによって、自己自身を肯定あるいは強化しようとした。人類初期の人々にこのような心理活動のあったことが多くの考古学発見や民俗学調査によって明らかにされている。

殷・周時代において、人々は依然として鬼神依存から離脱していない。王は神の意志を人間に伝える者として君臨しており、人間崇拝の動きが徐々に加速する社会情勢となって少数の特権者の特別な存在を広く知らしめた。王自身を畏敬させ、民を従わせるために盛んに青銅器を作り、器形や文様に含まれる意味への認識を定着をはかった。人間重視の動きが表れても、動物崇拝と対立したり排除することはなく、人間のために奉仕させるという思考が着実に進んでいた。



滑石仮面・湖南省溆浦県馬田坪

図61

河南省安陽市1004号墓からは、司令官や将軍が使用した青銅製兜が複数出土し、これらの軍人の装備などの器具は饕餮文で装飾されている。祭祀用の仮面と同じく頭頂部に管状の突起があり、鳥の羽などを挿していたと考えられ、軍人の勇猛さを表すのに適している。高さ26.5cm、最大径23cm(台湾・中央研究院歴史語言研究所の歴史文物陳列館)。また後漢時代の湖南省溆浦県馬田坪墓(1978年)²⁶⁰⁾湖南省常德市南坪郷の滑石製の浮き彫り覆面は人、獣面文合体であり、饕餮文と同一性格と考えられる(1977年)²⁶¹⁾。

○君臨四方の人面文

湖南省寧郷県黄材鎮で発見された殷代の鼎には胴体四面全てに人面文様が施されている。高さは38.5cmで、饕餮文、夔龍文、弦文、獣面文、雲文が施されている。「大禾」という銘文が铸られ、湖南省寧郷県辺りの地方統治者の持ち主の名前と推測されている。同時代に同類の銅器は発見されておらず、この鼎に示される人間表現は画期的なものである(1959年、湖南省博物館蔵)²⁶²⁾。内壁にある文字に明記された「大禾」という人物が四つの方向を凝視し、四方を監視、支配する様子である。口を閉じた厳粛な表情や耳をすましている警戒の表象に加え、君臨するような威圧感を備えている。この「大禾」という人間は一地方の王クラスか、あるいはじっと見つめているその目の表現からは「臣」の可能性もある。元々縦目から形成された「臣」字が監視の意を持つこ

とは前述の通りである²⁶³⁾。湖南省寧郷県黄材鎮からは殷代方尊の中で最大青銅器の四羊方尊が出土した(1938年、北京・国家博物館蔵)²⁶⁴⁾。また、陝西省で収集された四蛇方甗(1960年代、故宮博物院蔵)²⁶⁵⁾、および内モンゴル庫倫旗出土の「双性四面人陶壺」と称される器物も同一設計による作品である(2000年、北京・国家博物館蔵)²⁶⁶⁾。

人面文は、人間(場合によっては特定の人間)を顕揚する意図があり、鬼、神、神霊動物、猛獣などの文様表現はあくまで付属物として主題を際立たせるものであった。青銅器の造型は殷・周時代によく見られる長方形胴体、円形足で構成されており、人像の周辺に簡素な装飾饕餮文様が空白を埋めるように施された。

(二) 仮面解説

殷・周時代において製作された仮面の側面には穴が開いており、これに紐や縄などを通して儀式の際に特定の人物を演じていたと考えられる。「特定の人物」とは、先祖または地位の高い人間類や想像上の鬼神類であろう。𠂔(鬼)字の𠂔(上部の「田」)が仮面、𠂔(下部の「大」)などを占い師の正面姿と考えれば、前述の埋葬方法による形成の他、仮面具を被る祭祀関係者とみることもできるだろう。また、民俗学調査で裏付けられた事例によれば、死者を象った仮面、あるいは邪気払い用の仮面であるとも考えられる²⁶⁷⁾。

○神霊世界からの発信

殷代の江西省新干県大洋洲墓で発見された仮面は青銅製で、高さ53.5cm、幅38.5cmである(1989年、江西省博物館蔵)²⁶⁸⁾。顔が長方形に作られ、目が真ん丸で、鼻がかなり膨らんでおり、歯をむき出している。威嚇性の高い行事において、例えば、刑罰を宣告する法務官や執行者の証として使われた可能性がある。年代的に近い山東省青州市蘇埠屯1号墓の処刑用の鉞に施された突出した目、両端が上に向いている口、特に歯並びが酷似している。仮面として作られたとしても、必ずしも被っていたとは限らない。見世物としての使用や処刑台に乗せておく、または顔の下の筒のような部分に棒状のものを差し込み、高く持ち上げて使用されたかもしれない。



仮面・江西省新干県大洋洲

図 62

殷代の河南省安陽市侯家莊西北岡1400号墓出土の仮面は青銅製で、長さ25.3cm、幅23.4cmである。頬と顎が丸く作られ、目と鼻の裏側部分には突起物が付いており、頭頂部には環状で、どこかに掛けるものとして作られた可能性が高い(台湾・中央研究院歴史語言研究所蔵)。



仮面・四川省広漢市三星堆

図 63



仮面・四川省広漢市三星堆

図 64

殷代後期と思われる四川省広漢市三星堆から、世間を驚愕させた巨大な高さ260cm銅製人体像や、21件の青銅製縦目仮面が発見された。これは前例の無い大きいサイズの仮面群で、銅製と銅製黄金箔の二種類に分けられる(1986年、三星堆博物館蔵)²⁶⁹⁾。あらゆる角度から人間の顔

を变形して表わしており、蜀王をモデルにして作られた先祖祭祀用の仮面との推測が有力である。仮面は極度に瘦型でその表情は、稜線をもつアーモンド形の細長くて大きな目が顔いっぱいに表示され、鼻の頭は三角形に尖り口元は硬く結ばれている。顎は角張り、耳たぶには耳飾りをつけたと思われる円い孔が開けられている。作品全体が、厳肅な雰囲気に統一されている。地域的に近い金沙遺跡からも同じタイプの金製仮面が発見されており、文化の持続性を示しているものと思われる。

西周早期の北京市房山区琉璃河 1193 号墓出土、青銅製、4 件。口の両側が吊り上がり、微笑みに近い表情と思われる(1986 年、北京市文物研究所琉璃河考古隊蔵)²⁷⁰⁾。

以上の数点は、殷・西周時代の代表的面具である。

その他に喪葬専用の仮面と思われるものもあり、いずれも青銅製である。

殷代

北京市平谷県劉家河墓、5 件(1977 年)²⁷¹⁾。

陝西省西安市灊はきょう橋区療原村老牛坡墓(1986 年)²⁷²⁾。

西周時代

陝西省城固県蘇村、14 件(1964 年)²⁷³⁾。

同省同村、23 件(1976 年)²⁷⁴⁾。

同省岐山県賀家村 1 号墓(1973 年)²⁷⁵⁾、

河南省平頂山応国墓地 84 号墓、2 件(1986 年)²⁷⁶⁾。

陝西省長安県張家坡 17 号墓出土、変形人面飾²⁷⁷⁾。

○仮面の分類

殷・周時代の仮面類はその表現の程度差により、異なる様式に分けられる。まず人間本来の姿を表したものとして殷代河南省安陽市侯家莊出土の穏やかな表情の仮面が挙げられる。過度の強調は無いものの威厳が表わされている。西周時代の河南省三門峽市虢国墓地 2001 号墓出土の覆面は、埋葬時死者の顔の上に玉を並べたものである(1990 年、河南博物院蔵)²⁷⁸⁾。西周時代の北京市房山区琉璃河の仮面は同様に威厳があり、貴族階級層の人物が命令を発しているか、また労働階層の動きを監視しているような表情を有している²⁷⁹⁾。これらは現実から離れ過ぎずに神秘的な気風を作りあげた。このように主役としての人間本来の姿が多く採用された。殷・周時代の仮面具に隠された人間重視への推移と進化であろう。

また、部分的に変形、誇張されているタイプがある。仮面を付けることによって神の意思の伝達者に扮し、民とは異なる身分を強調した。その尋常でない能力を示すために、鋭い目や大きな耳でその特殊な洞察力を表している。四川省広漢市三星堆、成都市金沙や江西省新干県大洋洲の怪異表現の仮面はこの類に属する。極端に人間らしさの見られないタイプの仮面は、抽象的で随意性の高い鬼神や怪物を徹底的に改造した結果、猛獣以上の恐ろしさを持つようになり、改造、合体された怪物となっている。異なる祭祀儀式それぞれの用途に合わせた仮面製作が行われていたと考えられる。



図 65



仮面・四川省成都市金沙
図 66

○仮面の意義

現代社会における遊戯的な仮面と違い、古代の仮面はほぼ例外なく神を現実と結び付け、接触できるようにと工夫されたものである。心理的に神と人間との距離を縮めることができると信じたのが仮面の始まりと考えられる。死体に覆面をするのも仮面の一様である。死者の死に際の苦しい表情を隠し、生前の威容を永遠に留めておこうとする願ひがある。戦国・荀況著『荀子』「礼論」には「不飾則悪、悪則不哀。(飾らないのは悪印象であり、それでは哀悼にならない。)」と書かれている²⁸⁰⁾。死者より生きている人間の心理に配慮して覆面が使用されたのである。



殷周時代 仮面例

図 67

また、遺体を保存するという目的で漢代の甘肅省武威県磨嘴子の3基の墓の遺体^{めんちよう}に面罩(「覆面」または「布巾」ともいう)がされている。48号墓の男性遺体は麻類の綱(屍衾)で縛られ、顔面を絹製の面具で覆われた(1972年、甘肅省博物館蔵)²⁸¹⁾。また山東省長清県双乳山済北山墓からは玉覆面が発見されている(1996年)²⁸²⁾。遊牧民族地域では、特に遼時代喪葬文化の青銅製覆面の使用が注目されている。遼代の内モンゴル翁牛特旗烏丹鎮解放宮子夫婦墓²⁸³⁾、内モンゴル昭烏達盟寧城県小劉杖子墓²⁸⁴⁾、内モンゴル赤峰市阿魯科爾沁旗温多爾敖瑞山夫婦墓²⁸⁵⁾などの例が挙げられる。

仮面使用者の身分について、三星堆の百件近い青銅製の仮面から、使用者の範囲が拡大したことが分かる。王以外に祭祀関連の古い師や大臣、さらには一般民衆に及んだ可能性も考えられる。四川省広漢市三星堆仮面は、焼かれた後土坑に埋められた形で発見されている。自然界への報告や祈りの表現ではないかとされている。玉琮や、飛翔能力を持つ鳥、天に昇る煙などが地上や天界につながるルートとされていた。形象物を火であぶってから埋める儀式は、甲骨文字の中の「燎祭」^{りようさい}との関連性が示されている²⁸⁶⁾。いまだに四川省、雲南省などの西南地域にはこのような祭祀を行う民族が存在している。

一方、三星堆の全ての器物が壊れた状態で出土したことから、一部の有識者は燎祭ではなく外部からの侵入により破壊されたとの説を主張している。また、同じ文化系統と判明している四川省成都市金沙の縛られた髭髪式人像と同様の考えで、自損や自虐などの表れとも考えられる。『呂氏春秋』に記載されている殷代湯王は、干ばつに見舞われ、桑林で祈るため自虐行動を取った²⁸⁷⁾。東京国立博物館主催の『中国王朝の至宝』展の四川省成都市金沙遺品の中には、珍しい銅製の首のない人形がある。『山海経』の首なしの「刑天」ではないかと推測されている(東京展、2012年)。私見では、この仮面は現代の観光地にある顔出しパネルのような、「仮身」と言ってもよからう。躯体を当時は貴重だった金属で作り、顔部はそのまま見せて発令をするという発想があったかもしれない。ただ出土品のサイズは手のひらほどであるため、今後、より大きな人形が発見されることで裏付けられるであろう。

謝辞

本論文の作成にあたりご指導ご協力を賜りました鶴間和幸先生、南條竹則先生に心より御礼申し上げます。

注釈・参考文献

- 1) 〔前漢〕戴德、戴聖『礼記』「效特牲」。
- 2) 〔後漢〕許慎『説文解字』。
- 3) 〔清〕翟灝編『通俗編』。漢代『孝經緯』からの転載。
- 4) 戴応新「陝西神木県石峁龍山文化遺址の調査」、『考古』1977年第3期。
羅宏才「陝西神木石峁遺址石雕像群組の調査与研究」、『从中亚到長安（西部美術考古叢書）』、上海大学出版社、2011年。
- 5) 中国社会科学院考古研究所山西隊、山西省考古研究所、臨汾市文物局「山西襄汾陶寺城址2002年発掘報告」、『考古学報』2005年第3期。
- 6) 浙江省文物考古研究所「杭州市余杭区良渚古城遺址2006～2007年の発掘」、『考古』2008年第7期。
- 7) 石川忠久『新釈漢文体系第111巻 詩經(中)』小雅・斯干、明治書院、1998年。
- 8) 〔北宋〕李昉『太平御覽』「風俗通」。
- 9) 中国美術全集編輯委員会『中国美術全集・絵画編18 画像石画像磚』、上海人民美術出版社、1988年。
- 10) 樂山市崖墓博物館「四川樂山市沱溝嘴東漢崖墓清理簡報」、『文物』1993年第1期。
- 11) 〔戦国〕屈原『楚辭』「天問」。
- 12) 〔春秋〕孔子『論語』「先進」。
- 13) 〔前漢〕戴德、戴聖『礼記』「祭儀」。
- 14) 同注13。
- 15) 〔戦国〕莊子『莊子』「在宥」。
- 16) 〔戦国〕莊子『莊子』「応帝王」。
- 17) 〔戦国〕莊子『莊子』「知北遊」。
- 18) 〔戦国〕左思『春秋左氏伝』「昭公十二年」。
- 19) 張朋川「甘肅出土の幾件仰韶文化陶塑像」、『文物』1979年第11期。人頭形器口彩陶瓶は、馬家窯文化と仰韶文化のどちらの産物か見解が分かれている。著者張氏はこの出土遺跡の性質からは仰韶文化に属すると考えている。
- 20) 〔晋?〕『山海經』「大荒南經」。
高馬三良訳『山海經—中国古代の神話世界』、平凡社ライブラリー、1994年。
- 21) 青海省文物管理处考古隊、北京大学考古実習隊「青海楽都柳湾原始社会墓葬第一次発掘の初歩収獲」、『文物』1976年1期。
- 22) 中国美術全集編輯委員会『中国美術全集・工芸美術編1 陶磁(上)』、上海人民美術出版社、1988年。
- 23) 中国科学院考古研究所、陝西省西安半坡博物館『西安半坡 原始氏族公社聚落遺蹟』、文物出版社、1963年。
- 24) 同注22。
- 25) 同注22。
- 26) 青海省文物管理处考古隊、中国科学院考古研究所「青海楽都柳湾原始社会墓地反映出的主要問題」、『考古』1976年第6期。
青海省文物管理处考古隊『青海柳湾』、文物出版社、1984年。
- 27) ほとんどが黒色で光沢があり、製陶史においても蛋(卵)殻陶は工芸の画期的水準を示している。
- 28) 昌濰地区芸術館、考古所山東隊「山東膠県三里河遺址発掘簡報」、『考古』1977年第4期。
- 29) 山東省博物館「山東濰坊姚官莊遺址発掘簡報」、『考古』1963年第7期。
- 30) 曾五岳「福建發現史前礫石人頭彫像」、『文物天地』1990年第4期。
- 31) 甘肅省文物工作隊「大地湾遺蹟仰韶晩期地画の發現」、『文物』1986年第2期。
李仰松「秦安大地湾仰韶晩期地画」、『考古』1986年11期。
- 32) 同注23。
- 33) 〔晋〕張華著『博物志』「異聞」で、これらの人首、魚身画像は「河伯」と呼ばれている。
- 34) 宗日遺址発掘隊「青海宗日遺址有重要發現」、『中国文物報』1995年9月14日。
- 35) 『中国文物精華』編輯委員会編『中国文物精華』、1997年、文物出版社。
- 36) 青海省文物処考古隊「青海省大通県上孫家 出土の舞 紋彩陶盆」、『文物』1978年第3期。
- 37) 薛仰敬「原始舞蹈図像の又一実例 — 甘肅会寧牛門洞舞蹈紋彩陶盆」、『文物天地』1999年第6期。
- 38) 同注35。

- 39) 陳洪海、格桑本、李国林「試論宗日遺址的文化性質」、《考古》1998 年 5 期。
- 40) 李洪甫「連雲港將軍崖岩畫遺蹟的初步探索」、《文物》1981 年第 7 期。
- 41) 蓋山林「內蒙陰山山脉狼山地區岩畫」、《文物》1980 年 6 期。
蓋山林《陰山岩畫》、文物出版社、1986 年。
- 42) 王系松、許成、李文杰、衛忠「賀蘭山岩畫」、寧夏人民出版社、1990 年。
王伯敏「地畫畧略」、《2000 寧夏國際岩畫檢討人文集》、寧夏人民出版社、2001 年。
- 43) 寧夏回族自治區博物館「賀蘭山蘇峪口岩畫調查簡報」、《文物》2015 年第 1 期。
- 44) 陝西省考古研究院、榆林市文物考古勘探工作隊、神木縣文物局「陝西神木縣石峁遺址」、《考古》2013 年第 7 期。
陝西省考古研究院、榆林市文物考古勘探工作隊、神木縣文物局「陝西神木縣石峁遺址後陽灣、呼家窪地點試掘簡報」、《考古》2015 年第 5 期。
- 45) 同注 19。
- 46) 中國社會科學院考古研究所「甘肅省天水市師趙村史前文化遺址發掘」、《考古》1990 年第 7 期。
- 47) 魏京武、楊堃長「近年來陝西新出土的仰韶文化原始藝術品」、《考古與文物》1991 年第 5 期。
- 48) 中國社會科學院考古研究所渭水調查發掘隊「陝西渭水調查簡報」、《考古》1959 年第 10 期。
- 49) 同注 19
- 50) 黃河水庫考古隊華縣隊「陝西華縣柳子鎮考古發掘簡報」、《考古》1959 年第 2 期。
黃河水庫考古隊華縣隊「陝西省華縣柳子鎮第二次發掘的主要收穫」、《考古》1959 年第 11 期。
- 51) 中國社會科學院考古研究所「寶雞北首嶺」、文物出版社、1983 年。
- 52) 中國社會科學院考古研究所寶雞工作隊「一九七七年寶雞市北首嶺遺址發掘簡報」、《考古》1979 年第 2 期。
- 53) 趙康民「臨潼原頭、鄧家莊遺址勘查記」、《考古與文物》1982 年第 1 期。
楊堃長「仰韶文化的藝術考古簡述」、《華夏考古》1982 年第 1 期。
臨潼縣鄧家莊的陶製人像是、上半身しか残っていない。女性と考えられる。
- 54) A. 同注 19。
B. 中國美術全集編輯委員會《中國美術全集・雕塑編 1 原始社會至戰國雕塑》、人民美術出版社、1988 年。
- 55) 李永奎等「臨夏市發現馬廠類型人像彩陶」、《考古與文物》1991 年第 5 期。
- 56) 魏京武、楊堃長「近年來陝西新出土的仰韶文化原始藝術品」、《考古與文物》2003 年第 3 期。
- 57) 黃河水庫考古隊河南隊「河南陝縣七里鋪第一、二區發掘概要」、《考古》1959 年第 4 期。
- 58) 魏京武「我國最早的骨彫人頭像」、《考古與文物》1982 年第 5 期。
魏京武、楊堃長「近年來陝西新出土的仰韶文化原始藝術品」、《考古與文物》1991 年第 5 期。
- 59) 李振翼「甘肅出土的人頭形器口彩陶瓶」、《文物》1995 年第 5 期。
- 60) 何太平等「甘肅甘谷縣礼辛鎮遺址出土人面飾彩陶壺」、《考古與文物》1991 年第 2 期。
- 61) 同注 54 B。
- 62) 王文清等《陝西省十大博物館》、香港廣業貿易株式會社、1994 年。
- 63) 楊曉能「中國原始社會雕塑藝術概述」、《文物》1989 年第 3 期。
郝樹平「西安半坡博物館人頭壺簡介」、《史前研究》1984 年第 4 期。
- 64) 陝西考古研究所配合基建考古隊「陝西合陽吳家營仰韶文化遺址清理簡報」、《考古與文物》、1990 年第 6 期。
- 65) 陝西省考古研究所「陝西安康市柳家河仰韶文化遺址發掘簡報」、《考古與文物》、1999 年第 6 期。
- 66) 中國社會科學院考古研究所、河南省文物考古研究所等「河南靈寶市北陽平遺址試掘簡報」、《考古》2001 年第 7 期。
- 67) 王建新「陝西扶風案板出土的陶塑人像」、《文物天地》1992 年第 5 期。
西北大學文博學院考古專業「陝西扶風案板遺址第五次發掘」、《文物》1992 年第 11 期。
- 68) 同注 67。
- 69) 甘肅省博物館「甘肅秦安縣邵店大地灣新石器時代早期遺存」、《文物》1981 年第 4 期、
甘肅省博物館文物工作隊「1980 年秦安大地灣一期文化遺存發掘簡報」、《考古與文物》1982 年第 2 期。
甘肅省文物考古研究所編著《秦安大地灣—新石器時代遺蹟發掘報告（全 2 冊）》、文物出版社、2006 年 4 月。
- 70) 同注 19。
- 71) 同注 21。

- 72) 甘肅省博物館文物工作隊「永昌縣鴛鴦池新石器時代墓地的發掘」、《考古》1974年第5期。
同注54B。
- 73) 同注54B。
- 74) 河南省博物館等「河南省密縣莪溝北岡新石器遺跡」、《考古學集刊》第一輯、1978年。
- 75) 山東省省文物考古研究所「山東章丘市西河新石器時代遺址1997年的發掘」、《考古》2000年第10期。
- 76) 出光美術館編『中国の考古学展-北京大学サックラー考古芸術博物館所蔵』、出光美術館、1995年。
- 77) 中国社会科学院考古研究所山東隊、滕縣博物館『山東滕縣古遺址調查簡報』、《考古》1980年第1期。
- 78) 山東省文物考古研究所、山東省博物館、中国社会科学院考古研究所山東隊、山東省昌樂地區文物管理小組「山東姚官莊遺址發掘報告」、《文物資料叢刊》第5輯、1981年。
- 79) 黃河水庫考古隊河南分隊「河南陝縣七里舖第一、二區發掘概要」、《考古》1959年第4期。
- 80) 安陽地區文物管理委員會「河南湯陰縣白宮龍山文化遺址」、《考古》1980年第3期。
- 81) 湯池「試論濰平後台子出土的石彫女神像」、《文物》1994年第3期。
- 82) 王剛「興隆窪文化石彫人體像」、《中国文物報》1993年12月5日。
- 83) 同注54B。
河北省文物管理处「河北武安磁山遺址」、《考古學報》1981年第3期。
- 84) 中国社会科学院考古研究所內蒙古工作隊「內蒙古敖漢旗趙家溝一號遺址發掘簡報」、《考古》1988年第1期。
- 85) 四川長江流域文物保護委員會文物考古隊「四川省巫山大溪新石器時代遺址發掘記略」、《文物》1961年第11期。
李水城「從大溪出土石彫人面談幾個問題」、《文物》1986年第3期。
- 86) 李文傑「試論大溪文化与屈家嶺文化、仰韶文化的關係」、《考古》1979年第2期。
- 87) 闕統杭「望江汪洋廟新石器時代遺跡」、《考古學報》1986年第1期。
- 88) 同注54B。
- 89) 石河考古隊「湖北天門市鄧家灣遺址1992年發掘簡報」、《文物》1994年第4期。
- 90) 田園「石家河出土玉器拾零」、《江漢考古》1989年第1期。
- 91) 湖北省文物考古研究所等「湖北省天門市石家河古城譚家嶺遺址2011年的發掘」、《考古》2015年第3期。
- 92) 中国国家文物局国家文物鑑定委員會編、德留大輔監修・翻譯『中国文化財図鑑・第二卷 玉器』、科学出版社東京株式会社、2014年。
- 93) 湖南省博物館「湖南安鄉湯家岡新石器時代遺跡」、《考古》1982年第4期。
- 94) 文物編輯委員會編『文物考古工作十年1979-1989』、文物出版社、1991年。
- 95) 湖南省岳陽地區文物工作隊「華容縣車帖山新石器時代遺址第一次發掘簡報」、《湖南考古輯刊》第三集、1986年。
- 96) 賈樹憲「双墩陶塑紋面頭像」、《中国文物報》1994年6月26日。
闕統杭、周群「安徽蚌埠双墩新石器時代遺址發掘」、《考古學報》2007年第1期。
安徽省文物考古研究所等編著『蚌埠双墩一新石器時代遺址發掘報告』、科学出版社、2008年。
- 97) 浙江省文物管理委员会、浙江省博物館「河姆渡遺址第一次發掘」、《考古學報》1978年第1期。
吳玉賢「河姆渡的原始藝術」《文物》1982年第7期。林華東「河姆渡文化初探」、浙江人民出版社、1992年。
- 98) 河姆渡遺址考古隊「浙江河姆渡遺址第二期發掘的主要收穫」、《文物》1980年第5期。
- 99) 白哲士「海寧縣彭城遺蹟發現人面紋陶片」、《文物》1960年第7期。
- 100) 羅家角考古隊「桐鄉縣羅家角遺蹟發掘報告」、《浙江省文物考古所學刊》、文物出版社、1981年。
- 101) 安徽省文物考古研究所「安徽含山凌家灘新石器時代墓地發掘簡報」、《文物》1989年第4期。
安徽省文物考古研究所等「安徽含山縣凌家灘遺跡第三次發掘簡報」、《考古》1999年第11期。
- 102) 南京博物院「江蘇吳縣張陵山遺址發掘簡報」、《文物資料叢刊》第6輯。
- 103) A. 浙江省文物考古研究所反山考古隊「浙江余杭反山良渚墓地發掘簡報」、《文物》1988年第1期。
B. 浙江省文物考古研究所等編『良渚文化玉器』、文物出版社(北京)、兩木出版社(香港)、1999年1月。
- 104) 許玉林「後窪遺址」、《遼寧省本溪丹東地區考古學術討論會文集》、1985年。
卜昭文「後窪遺址出土40多件原始陶器石彫和人形陶像」、《光明日報》1987年5月18日。
許玉林、傅仁義、王伝普「遼寧東溝縣後窪遺址發掘概要」、《文物》1989年12期。
- 105) 郭大順、張克學「遼寧省喀左縣東山嘴紅山文化建築群址發掘簡報」、《文物》1984年第11期。
- 106) A. 郭大順、張克學「牛河梁紅山文化女神頭像的發現与研究」、《文物》1986年第8期。

- B. 遼寧省文物考古研究所「遼寧牛河梁紅山文化女神廟与積石塚群発掘簡報」、『文物』1986年第8期。
- 107) 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队「赤峰西水泉紅山文化遺址」、『考古学報』1982年第2期。
- 108) 王曉田「双性四面人陶壺初識」、『中国歴史文物』、2003年第6期。
- 109) (英) A. Angus Forsyth 著、楊建軍訳「中国的五件玉人像—新石器時代紅山文化玉器彫刻形式發展的研究」、『遼海文物學刊』1992年第2期。ケンブリッジ・フィッツウィリアム美術館の蔵品にもあると指摘されている。
- 110) 『光明日報』2016年1月29日記事による。
- 111) 遼寧省文物考古研究所、大連市文物管理委員会、莊河市文物管理弁公室「大連市北吳屯新石器時代遺址」、『考古学報』1994年第3期。
- 112) 許成、衛忠「寧夏石嘴山市黑石岬岩画」、『文物』1988年第9期。
- 113) [晋] 葛洪『西京雜記』。
- 114) 雲南省歴史研究所調査組「雲南滄源崖画」、『文物』1966年第2期。
林声「滄源崖画調査統計」、『文物』1983年第2期。
- 115) [唐] 魏徵、長孫無忌等『隋書』「地理志・下」。
- 116) 湯恵生「原始芸術中的『蹲踞式人形』研究」、『中国歴史博物館館刊』1996年第1期。
- 117) 河南省文物考古研究所、周口市文化局「鹿邑太清宮長子口墓」、中州古籍出版社、2000年。
- 118) (米) Marija Gimbutas (中国語訳 金芭塔斯)『活着的女神』、広西師範大学出版社、2008年2月。
- 119) 何德亮、牛瑞紅「大汶口—龍山文化屈肢葬俗探析」、『遼海文物學刊』1996年第1期。
- 120) 甘肅省博物館「武威皇娘娘台遺址第四次発掘」、『考古学報』1978年第4期。
- 121) 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「1969—1977年殷墟西区墓葬発掘報告」、『考古学報』1977年第1期。
- 122) 雲南省博物館「元謀大墩子新石器遺址」、『考古学報』1977年第1期。
- 123) 李友謀、陳旭「論裴李岡文化」、『考古』1979年第4期。
- 124) 承德地区文物保管所、灤平県博物館「河北省灤平県後台子遺址発掘簡報」、『文物』1994年第3期。
劉国祥「論灤平後台子下層文化遺存及関問題」、中国社会科学院考古研究所『考古求知集』、1997年、中国社会出版社。
- 125) 同注19。
- 126) 同注23。
- 127) 郝樹平「西安半坡博物館人頭壺簡介」、『史前研究』1984年第4期。
- 128) 同注105。
同注106A。
- 129) 同注107。
- 130) 巴林右旗博物館「內蒙古巴林右旗那斯台遺址調査」、『考古』1987年第6期。
- 131) 同注21。
青海省文物処考古隊、中国社会科学院考古研究所「青海楽都柳湾原始社会墓地反映出的主要問題」、『考古』1976年第6期。
- 132) 古代オリエント博物館『古代オリエントの豊穰の女神 いにしへのヴィーナスたち』、1994年。
- 133) 友部直監修『世界の至宝1 先史／オリエント／エジプト』、株式会社ぎょうせい、1983年。
- 134) 李友謀、陳旭「論裴李岡文化」、『考古』1979年第4期。
- 135) 同注106。
- 136) 浙江省文物考古研究所「余杭瑶山良渚文化祭壇遺址発掘簡報」、『文物』1988年第1期。
- 137) 遼寧省文物考古研究所編著「牛河梁 紅山文化遺址発掘報告(1983—2003)」全3冊、文物出版社、2012年11月。
- 138) 石興邦『半坡氏族公社』、陝西人民出版社、1979年。
- 139) [戦国] 墨翟『墨子』「修身篇」。
- 140) 濮陽市文物管理委員会「河南濮陽西水坡遺址発掘簡報」、『文物』1988年第3期。
- 141) 李学勤「論良渚文化玉器符号」、『湖南博物館文集』、岳麓書社、1991年1月。
- 142) 同注2。
- 143) [前漢] 劉歆『周礼』「春官」大宗伯。
- 144) 鶴間和幸監修『よみがえる四川文明—三星堆と金沙遺跡の秘宝展』、共同通信社、2004年。

- 145) 常州市博物館「江蘇武進寺墩遺址の新石器時代遺物」、『文物』1984年第2期。
安徽省文物考古研究所『潛山薛家岡』、文物出版社、2004年。
- 146) 東京国立博物館『上海博物館展』、中日新聞社、1993年。
- 147) 浙江省文物考古研究所『反山』、文物出版社、2005年10月。
- 148) 常州市博物館「江蘇武進寺墩遺址の新石器時代遺物」、『文物』1984年第2期。
- 149) 林巳奈夫「良渚文化の玉器若干をめぐって」、『MUSEUM』第360号、1981年3月。
- 150) 安徽省文物考古研究所「安徽含山凌家灘新石器時代墓地発掘簡報」、『文物』1989年第4期。
安徽省文物考古研究所『凌家灘—田野考古発掘報告之一』、文物出版社、2006年。
- 151) 〔前漢〕劉歆『周礼』「春官大宗伯」「以玉作六器(中略)」に関し、後漢鄭玄注「礼神者必象其類」。
- 152) 盖山林「内蒙阴山山脉狼山地区岩画」、『文物』1980年6期。
盖山林『陰山岩画』、文物出版社、1986年。
- 153) 山東大学歴史系考古專業「山東鄒平丁公遺址第四、五次発掘簡報」、『考古』1993年第4期。
- 154) 李新偉「中国史前社会上層遠距離交流網的形成」、『文物』2015年第4期。
- 155) 〔戦国〕列子『列子』「湯問」。
- 156) 〔戦国〕作者不明『尚書』「盤庚上」。
- 157) 〔周〕作者不明『詩経』「大雅」文王。
- 158) 陳夢家『殷墟卜辞総述』、中華書局、1988年。
- 159) 成都市文物考古研究所「成都金沙遺址の発現与発掘」、『考古』2002年第7期。
- 160) 肖楠「略論『午組卜辞』」、『考古』1979年第6期。
- 161) 〔前漢〕戴德、戴聖編『礼記』。
- 162) 朝日新聞社、中国国家博物館『悠久の美 中国国家博物館名品展』、2007年。
- 163) 中国社会科学院考古研究所編、王世民主編、『殷周金文集成・修訂増補本』、中華書局、2007年。
- 164) 藤堂明保『漢字の話 上』、朝日新聞社、1986年。
藤堂明保『漢字の起源』、講談社学術文庫、2006年。
- 165) 徐良高「從商周人像芸術看中国古代無偶像崇拜伝統」、『考古求知集』、中国社会科学出版社、1997年。
- 166) 梅原末治『河南安陽遺物の研究』、桑名文星堂、1941年。
- 167) 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「安陽殷墟5号墓の発掘」、『考古学報』1977年第2期。
- 168) 同注144。
- 169) 張長寿「記遼西新發現の獸面玉飾」、『考古』1987年第5期。
- 170) A. 陝西省考古研究所、陝西省博物館、陝西省文物管理委員會編『陝西出土商周青銅器(四)』、文物出版社、1984年。
B. 宝鸡茹家庄西周墓發掘隊「陝西省宝鸡市茹家庄西周墓發掘簡報」、『文物』1976年第4期。
- 171) 中国社会科学院考古研究所『殷墟婦好墓』、文物出版社、1980年。
- 172) 〔戦国〕作者不明『逸周書』「世俘解」。〔戦国?〕『穆天子伝』には周穆王が崑崙に行ったとの記載があり、主に中国西部民族に関する伝承、史実が混在している。殷墟出土品には新疆ホータン(和田)製玉の器物が数多く確認されていることから、両地の物的交流の証拠となっている。
- 173) 獬豸部落は匈奴族の先祖とされている。
- 174) 甘肅省博物館文物組「臺台県白草坡西周墓」、『文物』1972年第12期。
- 175) 朝格巴图「巴林右旗出土石雕人像」、『北方文物』2002年第4期。
- 176) 川又正智『漢代以前のシルクロード』、雄山閣出版、2006年。
- 177) 林巳奈夫「先殷式の玉器文化」、『MUSEUM』334号、1976年。
- 178) 天理参考館『シルクロードの古代文物—天理参考館50周年記念』、天理大学出版社、1980年。
- 179) 同注54B。
- 180) 西北大学歴史系考古專業「西安老牛坡商代墓地的発掘」、『文物』1988年第6期。
- 181) A. 陝西省考古研究所、陝西省博物館、陝西省文物管理委員會編『陝西出土商周青銅器(一)』、文物出版社、1979年。
B. 唐金裕、王寿芝、郭長江「陝西省固城県出土殷商銅器整理簡報」、『考古』1980年第3期。
- 182) 「夔神鼓」は泉屋博古館に所蔵されている。
泉屋博古館編集・発行『泉屋博古館 名品選』、便利堂制作、2002年。
- 183) 高至喜「商代人面方鼎」、『文物』1960年第10期。

- 184) 宝鷄市考古工作隊「陝西武功鄭家坡先周遺址發掘簡報」、《文物》1984年第7期。
- 185) 中国社会科学院考古研究所灋鎬工作隊「1984-85年灋西西周遺址、墓葬發掘報告」、《考古》1987年第1期。
- 186) 樋口隆康、徐萍芳監修『中国王朝の誕生 黄土に咲いた歴史とロマン—夏・殷・周時代の遺宝』、読売新聞社、1993年。
- 187) 同注145。
- 188) 同注35。
- 189) 同注35。
- 190) 臨朐県文化館、濰坊地区文物管理委員會「山東臨朐發現齊、鄆、曾諸国銅器」、《文物》1983年第12期。
- 191) 北京大学歴史系考古教研室商周組編著『商周考古』、文物出版社、1979年。
- 192) 山西省考古研究所「聞喜縣上郭村1989年發掘簡報」、山西省考古研究所編『三晋考古』第一輯、山西人民出版社、1994年。
- 193) 劉明科、高自若「宝鷄茹家庄新發現的幾件西周青銅芸術品」、《美術》1990年第3期。
- 194) 陝西周原考古隊「陝西扶風莊白一號西周青銅器窖藏發掘簡報」、《文物》1978年第3期。
- 195) 内蒙古自治区文物考古研究所、寧城县遼中京博物館『小黑石溝——夏家店上層文化遺址發掘報告』科学出版社、2009年。
- 196) 同注146。
- 197) 河南省文化局文物工作隊「河南鄭州上街商代遺址發掘報告」、《考古》1966年第1期。
- 198) 張敬国「含山大城敦遺址第四次發掘的收穫」、《文物研究》第四輯。
- 199) 李濟「跪坐蹲居与箕踞」、《中央研究院歷史語言研究所集刊》24本、1953年。
- 200) 台湾・中央研究院歷史語言研究所「歷史文物陳列館」HP。
梅原末治『殷墟』、朝日新聞社、1964年。
- 201) 石璋如「殷代頭飾舉例」、《中央研究院歷史語言研究所集刊》28本下、1957年。
- 202) 同注199。
李濟『李濟考古學論文選集』、文物出版社、1990年。
- 203) 同注201。
- 204) 同注181B。
- 205) 同注171。
- 206) 中国美術全集編輯委員會『中国美術全集・工芸美術編4 青銅器(上)』、文物出版社、1990年。
- 207) 東京国立美術館、朝日新聞社『大英博物館所藏日本・中国美術名品展』、朝日新聞社、1987年。
- 208) 傅永魁「洛陽市東郊西周墓發掘簡報」、《考古》1959年第4期。
- 209) 同注169。
- 210) 虢国博物館編著『虢国墓地出土玉器 第1輯』、科学出版社、2013年。
- 211) 羅西章「扶風出土商周青銅器」、《考古与文物》1980年第4期。
- 212) A. 甘肅省博物館文物隊「靈台白草坡西周墓」、《考古學報》1977年第2期。
B. 李永良編『河隴文化—連接古代中国與世界的走廊』、香港商務出版社、1998年。
- 213) 〔晋〕陳寿『三国志』「魏書」「毛玠伝」、「漢律、罪人妻子沒為奴婢、黥面」。
- 214) 〔前漢〕司馬遷『史記』「匈奴列伝」、「漢使王烏等窺匈奴。匈奴法、漢使非去節而以墨黥其面者不得入穹廬。王烏、北地人、習胡俗、黥面、得入穹廬。」
- 215) A. 同注212 A。
B. 甘肅省博物館文物隊「甘肅靈台白草坡西周墓」、《考古學報》1977年第2期。
- 216) 同注215 B。
- 217) 同注170 B。
- 218) 岐阜市歴史博物館編『中国陝西省宝鷄市周原文物展』、岐阜市歴史博物館、1988年。
- 219) 山西省考古研究所大河口墓地聯合考古隊「山西翼城縣大河口西周墓地」、《考古》2011年第7期。
- 220) 同注186。
- 221) 北京大学考古学系、山西省考古研究所「天馬—曲村遺址北趙晉侯墓地第二次發掘」、《文物》1994年第1期。
- 222) 陝西省考古研究所、渭南市文物保護考古研究所、韓城市景区管理委員會編著『梁帶村芮国墓地—2007年發掘報告』、2010年、文物出版社。
- 223) 尹盛平「西周蚌彫人頭像種族探索」、《文物》1988年第1期。

- 224) 同注 214「周本紀」。
- 225) 同注 171。
- 226) 〔戦国〕呂不韋編『呂氏春秋』。
- 227) 同注 159。
- 228) 河南省文物考古研究所『舞陽賈湖』、科学出版社、1999 年。
- 229) 石志廉「商代人形玉佩飾」、『文物』1960 年第 2 期。
- 230) 山東省文物考古研究所、沂水県文物管理站『山東沂水劉家店春秋墓發掘簡報』、『文物』1984 年第 9 期。
- 231) 張光直『中国青銅時代』、小南一郎、間瀬収芳訳、平凡社、1989 年 9 月。
- 232) 臨汝県文化館「臨汝県閭村新石器時代遺址調査」、『中原文物』1981 年第 1 期。
- 233) 嚴文明「鸛魚石斧図跋」、『文物』1981 年第 12 期。
- 234) 同注 51。
- 235) 西安半坡博物館、武功県文化館「陝西武功發現新石器時代遺址」、『考古』1975 年第 2 期。
- 236) 陝西省博物館、乾県文教局唐墓發掘組「唐章懷太子墓發掘簡報」、『文物』1972 年第 7 期。
- 237) 周到「南陽漢画像石中の幾幅星象図」、『考古』1975 年第 1 期。
- 238) 葛介屏「安徽阜南发现殷商時代的青銅器」、『文物』1959 年第 1 期。
- 239) 著者不明『周易』「乾卦文」。
- 240) 〔戦国〕左思明『春秋左氏伝』。「徐夷」も「諸夏」の一つで、華夏方国に所属していた。
- 241) 容庚、張維持『殷周青銅器通論』、1984 年、文物出版社。
- 242) 「司母戊鼎」は、2011 年から司母戊鼎の所有者の国家博物館では、「后母戊鼎」に改名されている。
- 243) 同注 171。
- 244) 同注 238。
石志廉「談談龍虎尊的幾個問題」、『文物』1972 年第 11 期。
- 245) 同注 144。
- 246) 石志廉「談粵博藏商虎食人形銅卣的真偽問題」、『中国歴史博物館館刊』1989 年総第 12 期。
- 247) 時期について、「殷代後期論」は林巳奈夫「神なる虎豹と人間形鬼神」、『泉屋博古館紀要 三』、1986 年による。「西周Ⅲ期論」は林巳奈夫「華中青銅器若干種と羽渦紋の伝統」、『泉屋博古館紀要 十』、1994 年による。本器に関する記述は羅振玉『匜盧日札』、『国学叢刊』、1910 年。
再刊『雪堂所藏古器物図説(外九種)』、上海古籍出版社、2013 年。
濱田耕作『刪訂泉屋清賞』、住友吉左衛門出版、1934 年。
梅原未治『日本蒐儲支那古銅精華』、大阪 山中商会出版、1959 年～1964 年、1962 年。
- 248) 陳夢家「殷墟銅器」、『考古學報』第七冊、1954 年。
- 249) 張文清「鹿邑太清宮遺址考古發掘又有重大發現」、『中国文物報』、1998 年 6 月 3 日。
河南省文物考古研究所、周口市文化局「鹿邑太清宮長子口墓」、中州古籍出版社、2000 年。
- 250) 河南省唐河県針織廠「唐河県針織廠二號漢画像石墓」、『中原文物』1985 年第 3 期。
- 251) 〔晋〕陳寿『魏志』「倭人伝」。
- 252) 顧頡剛『史林雜識初編』、中華書局、1963 年。
- 253) 同注 251。
〔南朝・宋〕范曄『後漢書』「東夷列伝」。
- 254) 同注 103 A。
- 255) 河北省博物館、文物管理处「河北藁城台西村的商代遺址」、『考古』1973 年第 5 期。
李衆「關於藁城商代遺址出土的鉄刃銅鉞」、『考古學報』1976 年第 2 期。
- 256) 同注 226「先識」。
- 257) 〔戦国〕左丘明『春秋左氏伝』「文公十八年」。
- 258) 〔前漢〕東方朔『神異経』。
- 259) 林巳奈夫「所謂饕餮紋は何を表はしたものか—同時代資料による論證—」、『東方學報(京都)』第 56 冊、1984 年。
- 260) 湖南省博物館「湖南溆浦馬田坪戰国西漢墓發掘報告」、『湖南考古輯刊 2』、1984 年。
- 261) 湖南省文物考古研究所 HP。
- 262) 同注 183。
- 263) 汪寧生「釈臣」、『考古』1979 年第 3 期。

- 264) 高至喜「湖南寧鄉黃材發現商代銅器和遺址」、《考古》1963年第12期。
- 265) 杜迺松「記九象尊与四蛇方甗」、《文物》1973年第12期。
- 266) 同注108。
- 267) 後藤淑、廣田律子『中国少数民族の仮面劇』、木耳社、1991年。
- 268) 江西省文物考古研究所、江西省新干縣博物館「江西新干大洋洲商墓發掘簡報」、《文物》1991年第10期。
江西省文物考古研究所、江西省博物館、新干縣博物館『新干商代大墓』、文物出版社、1997年。
- 269) 四川省文物管理委員會、四川省文物考古研究所、四川省廣漢縣文化局「廣漢三星堆遺址一號祭祀坑發掘簡報」、《文物》1987年第10期。
四川省文物管理委員會、四川省文物考古研究所、四川省廣漢縣文化局「廣漢三星堆遺址二號祭祀坑發掘簡報」、《文物》1989年第5期。
- 270) 中国社会科学院考古研究所、北京市文物研究所琉璃河考古隊「北京琉璃河1193號大墓發掘簡報」、《考古》1990年第1期。
- 271) 北京市文物管理处「北京市平谷縣發現商代墓葬」、《文物》1977年第11期。
- 272) 同注180。
劉士莪『老牛坡』、陝西人民出版社、2001年。
- 273) 同注181B。
- 274) 同注181B。
- 275) 陝西省博物館、陝西省文物管理委員會省「陝西岐山賀家村西周墓葬」、《考古》1976年第1期。
- 276) 河南省文物考古研究所、平頂山市文物管理委員會「平頂山応国墓地八十四號墓發掘簡報」、《文物》1998年第9期。
河南省文物研究所、平頂山市文物管理委員會「平頂山応国墓地九十五號墓的發掘」、《華夏考古》1992年第3期。
河南省文物考古研究所、平頂山市文物管理局編『平頂山応国墓地』、大象出版社、2012年。
- 277) 同注186。
- 278) 同注210。
- 279) 同注270。
- 280) 〔戦国〕荀況『荀子』「礼論」。
- 281) 甘肅省博物館「武威磨嘴子三座漢墓發掘簡報」、《文物》1972年第12期。
- 282) 山東大学考古系、山東省文物局、長清縣文化局「山東長清縣双乳山一號漢墓發掘簡報」、《考古》1997年第3期。
- 283) 翁牛特旗文化館、昭烏達盟文物工作站「內蒙古解放營子遼墓發掘簡報」、《考古》1979年第4期。
- 284) 内蒙古自治区文物工作隊「昭烏達盟寧城縣小劉杖子遼墓發掘簡報」、《文物》1961年第9期。
- 285) 赤峰市博物館考古隊、阿魯科爾沁旗文物管理所「赤峰市阿魯科爾沁旗温多爾敖瑞山遼墓整理簡報」、《文物》1993年第3期。
- 286) 池田末利『卜辭燎祭考』、東海大学出版會、1981年。
- 287) 同注224。「順民」。「昔者湯克夏而正天下、天大旱、五年不收、湯乃以身禱於桑林、曰、余一人有罪、無及萬夫。
萬夫有罪、在余一人。無以一人之不敏、使上帝鬼神傷民之命。於是翦其髮、其手、以身為犧牲、用祈福於上帝、民乃甚說、雨乃大至。則湯達乎鬼神之化、人事之傳也。」

〔図版出典〕

- 図1 後漢 女媧像・四川省崇慶縣出土 中国美術全集編輯委員會『中国美術全集・絵画編18 画像石画像磚』、上海人民美術出版社、1988年。
- 図2 後漢 投壺像・河南省南陽市出土 図1同。
- 図3 人頭形器口彩陶甗・甘肅省秦安縣出土 中国美術全集編輯委員會『中国美術全集・彫塑編1 原始社会至戦国彫塑』、人民美術出版社、1988年。
- 図4 双耳彩陶壺・青海省樂都縣出土 筆者が北京・国家博物館にて撮影。
- 図5 蛙文像甗・青海省樂都縣出土 中国美術全集編輯委員會『中国美術全集・工芸美術編1 陶磁(上)』、上海人民美術出版社、1988年。
- 図6 人頭魚像盆・陝西省西安市出土 図5同。

- 図7 彩陶壺・甘肅省蘭州市杏核台出土 図5同。
- 図8 彩陶鉢・甘肅省臨夏水地陳家出土 図5同。
- 図9 人頭魚絵・陝西省西安市出土 中国科学院考古研究所、陝西省西安半坡博物館『西安半坡 原始氏族公社聚落遺蹟』、文物出版社、1963年。
- 図10 物持ち文彩絵盆・青海省同徳県出土『中国文物精華』編輯委員会編『中国文物精華（中国文物の粹）』、1997年、文物出版社。
- 図11 舞蹈文彩絵盆・青海省大通県出土 図5同。
- 図12 舞蹈文盆・青海省同徳県出土 図5同。
- 図13 岩絵人頭図・江蘇省連雲港市発見 図3同。
- 図14 岩絵人頭図・内モンゴル陰山発見 図3同。
- 図15 人頭像・陝西省神木県石峁採集 中国国家文物局国家文物鑑定委員会編、徳留大輔監修・翻訳『中国文化財図鑑・第二巻 玉器』、科学出版社東京、2014年。
- 図16 人頭像・甘肅省秦安県出土 図3同。
- 図17 人頭像・甘肅省天水市趙村出土 中国社会科学院考古研究所「甘肅省天水市師趙村史前文化遺址発掘」、「考古」1990年第7期。
- 図18 人頭像・陝西省扶風県出土 図3同。
- 図19 人頭像・陝西省宝鶏市出土 中国社会科学院考古研究所『宝鶏市北首嶺』、文物出版社、1983年。
- 図20 人頭像・甘肅省臨夏市採集 李永奎等「臨夏市発現馬廠類型人像彩陶」、「考古与文物」1991年第5期。
- 図21 人頭像・陝西省商県出土 図3同。
- 図22 人頭像・陝西省黄陵県出土 王文清等『陝西省十大博物館』、香港広彙貿易株式会社、1994年。
- 図23 人頭像・スウェーデン(SWE)国立東方博物館蔵 図3同。
- 図24 人頭像・四川省巫山県出土 図3同。
- 図25 人体(跪坐)像・湖北省天門県鄧家湾家屋脊出土 図3同。
- 図26 人頭像・湖北省天門県肖家屋脊出土 図15同。
- 図27 人頭像・安徽省蚌埠市双墩出土 安徽省文物考古研究所等編著『蚌埠双墩—新石器時代遺址発掘報告』、科学出版社、2008年。
- 図28 人体像・安徽省含山県凌家灘1号墓出土 図15同。
- 図29 神人像・浙江省余杭県反山良渚出土 浙江省文物考古研究所反山考古隊「浙江余杭反山良渚墓地発掘簡報」、「文物」1988年第1期。
- 図30 妊婦裸体像・遼寧省喀左県出土 図3同。
- 図31 女神頭像・遼寧省凌源県出土 図3同。
- 図32 殷 虎頭跪座人像・河南省周口市出土 河南省文物考古研究所、周口市文化局『鹿邑太清宮長子口墓』、中州古籍出版社、2000年。
- 図33 少女頭像・甘肅省礼県出土 図3同。
- 図34 北メソポタミア(ハラフ期)女神像・北メソポタミア出土 古代オリエント博物館『古代オリエントの豊穰の女神 いにしへのヴィーナスたち』、1994年。
- 図35 旧石器時代(オーリニャック-ベリゴール期)ヴィレンドルフのヴィーナス女神像・オーストリア出土 友部直監修『世界の至宝1 先史/オリエント/エジプト』、株式会社ぎょうせい、1983年。
- 図36 玉琮・四川省成都市金沙出土 鶴間和幸監修『よみがえる四川文明 三星堆と金沙遺跡の秘宝展』、共同通信社、2004年。
- 図37 幾何文琮・上海市青浦県出土 東京国立博物館『上海博物館展』、中日新聞社、1993年。
- 図38 獣面文琮・江蘇省武進県出土 中国美術全集編輯委員会『中国美術全集・工芸美術編9 玉器』、文物出版社、1989年。
- 図39 人体像・安徽省含山県凌家灘出土 安徽省文物考古研究所「安徽含山凌家灘新石器時代墓地発掘簡報」、「文物」1989年第4期。安徽省文物考古研究所編『凌家灘玉器』、文物出版社、2000年。
- 図40 頭部装飾・内モンゴル陰山発見 図3同。
- 図41 祭祀座像・四川省広漢市三星堆出土 図36同。
- 図42 玉璋文様・四川省広漢市三星堆出土 図36同。
- 図43 山字形髻人像・陝西省宝鶏出土 図3同。
- 図44 盞鉤戟人頭像・甘肅省靈台県出土 図3同。

- 図 45 人面文鼎・湖南省寧鄉県出土 図 3 同。
- 図 46 人頭像・陝西省武功県出土 宝鶏市考古工作隊「陝西武功鄭家坡先周遺址発掘簡報」、『文物』1984 年第 7 期。
- 図 47 変形人面飾・陝西省長安県出土 樋口隆康、徐萍芳監修『中国王朝の誕生 黄土に咲いた歴史とロマン－夏・殷・周時代の遺宝』、読売新聞社、1993 年。
- 図 48 人体像・河南省安陽市出土 図 38 同。
- 図 49 手錠人体俑・河南省安陽市出土 図 3 同。
- 図 50 人体形飾・青海省湟源県出土 中国美術全集編輯委員会『中国美術全集・工艺美术編 4 青銅器（上）』、文物出版社、1990 年。
- 図 51 人物龍鳳獸面飾・陝西省長安県出土 図 47 同。
- 図 52 人頭像・陝西省扶風県出土 図 3 同。
- 図 53 車飾人体像・陝西省宝鶏市出土 図 3 同。
- 図 54 跪座人体像・河南省安陽市出土 図 38 同。
- 図 55 自虐人体俑・四川省成都市金沙出土 図 36 同。
- 図 56 扁足方鼎の饗餐文様・河南省安陽市婦好墓出土 図 47 同。
- 図 57 璇璣器・四川省成都市金沙出土 図 36 同。
- 図 58 鸛魚石斧図缸・河南省臨汝県出土 中国美術全集編輯委員会『中国美術全集・絵画編 1 原始時代至南北朝絵画』、人民美術出版社、1986 年。
- 図 59 龍虎尊・安徽省阜南県出土 図 3 同。
- 図 60 亜醜鉞・山東省青州市出土 図 50 同。
- 図 61 滑石仮面・湖南省溆浦県馬田坪 63 号墓出土 湖南省博物館「湖南溆浦馬田坪戦国西漢墓発掘報告」、『湖南考古輯刊 2』、1984 年。
- 図 62 仮面・江西省新干県大洋洲出土 中国国家文物局国家文物鑑定委員会編、廣川守監修、角道亮介翻訳『中国文化財図鑑・第四卷 青銅器』、科学出版社東京株式会社、2015 年。
- 図 63 仮面・四川省広漢市三星堆出土 図 41 同。
- 図 64 仮面・四川省広漢市三星堆出土 図 41 同。
- 図 65 匍鴨盃・河南省平頂山市応国墓地 84 号墓出土 図 62 同。
- 図 66 仮面・四川省成都市金沙出土 成都市文物考古研究所「成都金沙遺址 I 区梅苑地点発掘一期簡報」、『文物』2004 年第 4 期。
- 図 67 殷周時代 仮面例 徐良高「從商周人形造像看中国的無偶像崇拜伝統」、中国社会科学院考古研究所編著『考古求知集－96 考古研究所中青年學術討論會文集』、中国社会科学出版社、1997 年。